
死神の杖

RedHands

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神の杖

【Nコード】

N4182W

【作者名】

Red Hands

【あらすじ】

様々な人々の人生を見守る死神のお話

庭師

「ほう、相変らず見事なものだな。」

王冠を被った男が草の手入れをしている私に話しかけてきた。私はそれが直ぐにこの国の王だと分ると振り返って深々と頭を下げる。王は、それを掌で制すると、にこやかな表情を保ったまま威厳のある声で優しく語りかける。

「余の言は気にしなくてよい。そのまま仕事を続けてくれ。」
「はっ。」

私はそう言われる事は予想済みだったので、さして驚きもせずに再び仕事に戻った。そんな私の背中から再び威厳のある声が話しかけてくる。

「それにしても相変らず見事なものだな。限られた者しか王宮に入れないのが勿体ない。国民全てに解放したいものだ。」

「いえいえ、この庭は私が先代、先々代より時間をかけて王の為に作り上げてきたものです。その目にこの庭を焼付け、その足で散策される特権を持ったものがこの国の王たる資格であります。」

「父上も生前に同じ事を口にしていたような気がする。成程な。これは余の失言であった。」

私はこの歳まで余り自分を賛辞したことはないが、この庭だけは庭師としてこれ以上のものは出来まいと、自分の生涯の仕事の総決算のつもりで取り組んできた。それ程広い庭ではないが、木々や池の形、そして造りすぎないよう配所した茂みの草1つ1つに至るまで、私の技量と自然が一体となって作り上げた傑作である事は疑いの欠片もない。

この国の温暖な風土もそれを更に促進させる材料だ。四季があるにも関わらず、冬と夏の温度差がそれ程激しいわけではなく。1日の昼と夜の気温差もそれ程無い。殆どの植物が1年を通して花をつけることが出来る。だから季節によって庭の色を変える必要もない。

多分それ程大きく手を入れなくても永遠に美しさを保っているような錯覚に陥る時がある程だった。

「それももう見納めかもしれんがな。」

王は寂しそうにポツリと呟いた。先程までの威厳が明らかに少し萎んでいるその声を聞いて私は手を止めて振り返る。

「戦…ですか。」

「ああ、そうだ。」

王の目は遠くに目を向けている。諦めとも悟りとも取れる表情を浮かべて口をへの字にきゅっと結んでいた。私はこの王が赤ん坊の時から良く知っている。何か覚悟を決めて緊張した時のその癖は王の座についても変わらない。そしてそれは私の癖でもあった。私自身には家族がいない為、彼をまるで自分の息子の様に錯覚する事すらある。

「今度の戦はな。おそらく無傷では帰れまい。いや、それどころか、帰ってくる事すらできなかもしれないのだな。」

「これはまた陛下に似合わない弱気な事を仰せられる。」

「何も言うな。」

基本的には、人に弱みなど見せない性格ではあるが、王の家に生まれて幼い頃から緊張の糸を張り巡らせて来た王にとって、この庭や私は、心を許せる数少ない存在だったのだろう。

「更に磨きをかけてお帰りをお待ちしておりますよ。」

私は励ますつもりで軽くそう言つて王の表情を見上げた。王は悲しそうな表情のまま私の目を見返すと、少し口を吊り上げて苦笑いする。私であすら余り見たことのない表情だった。

「そうだな、とりあえずまた生きて帰つてこの庭でゆっくりしたいものだな。」

王は振り返つて去つていった。その背中はいつともよりも小さく見える。

少し昔話をしよう。

この国は先々代が建国した歴史の浅い国。その血塗られた歴史は、多くの敵を造り、戦いの絶えない国だった。この庭はそんな国の王宮の一角にひっそりと作られた。

先々代王が引退して息子である先代王に王位を譲った頃、私は各地を庭師として周り自分の技術を磨いていた。町の公園から貴族階級の屋敷の敷地までかなり数々の作品を手がけてきていた。

時には仕事中に戦が始まった事もあり、私の作った公園がわずか1日で灰になる風景も見てきた。その度に、私は自分の仕事に自信を失う日々が続いた。自分のやっている事に意味があるのだろうか、どう心血を注いでもそれが一瞬でなくなるようなものならば、いっそ自然に任せるままにしておいた方が、よくないだろうか。

そして、それこそが草木の本来あるべき姿なのだろう。

私は、ある国で仕事をしていた父親を尋ねた。

「やあ。」

まるで、遠方からの親友を扱うように父親は私に接する。

「久しぶりだね。母さんは？」

私が親元に戻ってきたのは実に、二十年ぶりだった。当たり前のように迎え出てくれると思っていた両親も、既に見る影もなく年老いていた。

私が母の居場所を尋ねると、父は少し悲しそうな目で立ち上がり家の裏口へと向かう。

「？」

私は静かに立ち上がるとその後について行った。何処へ向かうとしているのかは、大体分ってはいたが、私は敢えて何も言わず、父の小さくなった背中について行った。

裏口を出ると、あまり賑やかで無い通りに出る。この国の城壁が見えるほどの町外れにある我が家から城の門まで歩いてそれ程の距離ではないが、すっかり弱った父の足では思ったより遠く感じるほど遅々としていた。

私は敢えて父に肩を貸したり、背負ったり、「何処へ」と尋ねたりせずに、その速度に合わせてついて行く。

「手を合わせてやってくれ。」

とある墓石の前で父は俯いて私に言う。父に言われるまでもなく私は既に両手を合わせて目を閉じていた。

生前の母は私の我儘を全て許してくれた。私の目から雫が溢れ落ちる。

ふと目を開けると少し離れた場所にある木に誰かがもたれかかって眠っていた。帽子から靴まで全て黒一色の黒ずくめの男を見て私は父を振り返る。

「父さん。」

「ん？」

「あの木の所にいる人が見える？」

私はその木を指差す。父は首を縦に振った。

「ああ、ここ何日か、毎日あそこでずっとああやつてるのを見るな。知り合いか？」

「いや。」

そうか。見えるのか……。私は口をへの字にきゅっと結んで再び目を閉じて手を合わせる。

庭師としての父は職人という言葉がこれ程似合う人は見たことがないくらい頑固で融通の聞かない性格だった。特に仕事では、まず人の言う事に耳を傾ける事もなく、ひたすら黙々と作業をこなす日々を送っている。時には、数日家に帰らずに、隣国にまで出かけては仕事をこなしていた。

私は子供の頃に何度も父の仕事を手伝った事があった。その頃の父には何人か弟子がいて、父は未熟な彼ら（もつとも父から見ても未熟という事でしかなく、彼らもまた庭師としての腕は一流だったようだ）を頭ごなしに、怒鳴りつけていた。

家では、寡黙に食事と晩酌している所以外見たことがない父が生き生きとしている様に見えた。だが、そんな独りよがりの仕事ぶりに定着する弟子など居るはずもなく、１年以内に父の周りには誰も居なくなつた。それでも父は動じる事なく、日々の仕事をコツコツとこなしている。

そのうち時々手伝っていた私に今度は怒鳴り散らす様になる。

思えばあれが、私の立場が、唯の息子から弟子になった瞬間だつたと思う。

ただ、私は家族でもあるので他の弟子の様に逃げ出すわけにも行かず、ひたすら耐えるしかなかった。そして、庭師として独立しても、相変らず父とともに仕事を続けていた。

そして数年経つたある日、私は衝動的に思い立って父に「旅に出たい」と申し出た。

「旅？、半人前が何を下らん事言つてやがる。明日からの仕事はどうするつもりだ！」

予想してたのと言一句違わない言葉が返ってくる。

「父さん、僕は確かに庭師としては半人前なのかもしれない。でも、父さんも若いときはあちこちまわつて、そして今の父さんがあるんじゃないか。僕も世界を見てみたいんだ。」

「馬鹿野郎！、俺はな住んでいた村が戦で焼け野原になつて仕方なく放浪していたんだ。このご時勢に１人旅なんざ、狂気の沙汰じゃねえ。」

「だつて、父さんの頃だつてあちこちで戦は起こつてたんだよね。

僕なら大丈夫だから……。」

「おめえみてえな世間知らずを世の中に出しても、人様の迷惑になるだけだ！」

「世間知らずだから、世間を見に行くんだ！、父さんの言う事は矛盾してるよ！」

「やっかましい！、屁理屈言つてる暇があつたら早く寝ろ！」

父は晩酌していた酒瓶を僕に投げつけて、その場でうつ伏せにな

りそのまま寝てしまった。母親が台所から出てきて父の背中にそつと毛布をかける。

「わからず屋……」

その頃の私の呟きを聞いて母親がそつと私の肩に手を置く。

「父さんはね。お前の事を手放したくないんだよ。どんな仕事も受け継ぐ人がいないと意味が無い。特にそれが自分の子供なら、親としても庭師としてもこんな嬉しい事はないからね。」

母の静かで落ち着いた声。私を説得するでも諭すでもなく、ありのままの気持ちをただ言葉にしているだけで、人に何かを押し付けない声。父とはまるで正反対だった。

「僕は仕事を投げ出したりはしてない。必ず帰ってきて親孝行はするよ。なのに……」

私は、悔しそつに歯を食いしばった。

「……少し、待つてなさい。」

母は私を椅子に座らせると奥の部屋に消えていった。

数分後、鞆を1つ持って現れる。

「これはね。昔この人が旅をしていた頃に使っていた鞆なの。何処かの貴族の庭の仕事をしている時に仲良くなった同年の人に貰ったものなんですって。」

「へえ。」

僕は生まれた時からこの家にずっと居るが、その鞆は初めて見るものだった。数個のボタンには何か動物の彫刻が刻まれている。

目利きなどは一切できないが、それが途方も無い価値があるような気がしていた。

「でも何でそれを僕に？」

鞆を手渡す母を見て、私は当然の疑問を口にする。

「言つて世間を見てきなさい。」

母は一言静かにそう言つた。

「え？、でも……」

私は傍らでうつ伏せになつていびきをかいている父をチラリと見

た。

「この人には私から言っておくわ。だから貴方は遠慮する事ないのよ。」

手渡された鞆は少し重かった。慌てて中を開いてみる。そこには古いランプや替えのシャツが数枚と、飲み物を入れる皮袋や仕事に使う道具が入っている。そして脇のポケットにはお金が少し入っていた。

「こ、これは……。」

「手ぶらってわけにはいかないでしょ。」

あの数分でここまで周到に用意できるわけが無い。母は、その頃の私がいつ言い出しても良い様にずっとこれを仕舞っていたのだらう。

「う……。」

私は泣きながら俯いた。

「ほら、一人で旅に出ようと言うのに、出発前から泣く人がありますか。」

背中をさする母の手の感触を私は一生忘れない。

私は鞆を肩にかけると、そのまま、家を飛び出した。通りに人はいない。城門は直ぐそこにある。私は城門を潜り抜け全力で暫く走った。振り返らずとも、見送って手を降っている母の姿が見えたようない気がした。

それからの私はひたすら鬼の様に働いた。ただただ、仕事を見つけては雇ってもらい仕事をこなす。生きていく為には好きな事だけをしているわけにはいかず、皿洗いから傭兵まで、何でもやった。必死だった。

ただ、何をやっても最後は庭師としての仕事に戻ってきた。それ以外は私の生涯の枝葉みたいなものだ。

6年ほど経過したある日、私はとある城の建築の手伝いでとある

国で砂袋を担いでいた。

「ふう、疲れた。」

昼休みに配給された弁当を食べながら周りを見回す。ようやく城壁が形になってきたばかりで庭などという贅沢なものは影も形も見当たらない。

「よう、隣いいかい？」

この現場で知り合った男が、私の隣に座って弁当の蓋を開ける。

私の方が先に食べ始めた箸なのにあつという間に男の弁当の方が先に空になっていく。

「そついや、君は何処の国の生まれなんだい？」

一気に食べてしまうのが勿体無いと思ったのか、男は一度箸を止めて一息つく合間に私に話かけてくる。

「ここから北の方ですよ。」

「へえそうか。俺は東から来たんだ。武者修行中だな。実家に帰れば王の剣術指南役になるんだよ。」

「はあ。」

滴る汗が疲れを物語っている箸なのだが、それを吹き飛ばす様に男の口からは次々と言葉が溢れてくる。聞いてもない自分の歴史を私に押し付けた後、男は唐突に小声になり私の耳元で囁く。

「そついや、お前も気をつけろよ。」

「何を？」

男はキョロキョロと辺りを見回して再び口到手を当てた。

「最近この城の建設で人が何人か死んでいるだろう。」

「ああ、確かに。」

城の土台の上に建物の骨格を建て始めた最近は人数が増えてきたこともあり、いざこざや事故がなんとなく増えてきた。そして、前日、遂に事故で死亡者が出了たことが噂になっている事は私も知っている。

「それが何か？」

「それでよ。最近、死神が出てきたらしいぞ。」

「死神？」

「ああ、そいつが見えたら死ぬらしい。この前死んだ奴はそれが見えたらしいぞ。」

「へえ……。」

眉唾ものだが、物騒な事を言っている割には嬉しそうな顔をしている様に見える。

「精々、気をつけるんだな。俺が聞いたそいつの特徴はだな。」

そいつはそこまで話すと思いきや上を見上げる。しかし、思いきや上を見上げたのか、再び弁当の残りをガツツキ始めた。

「まあ、気をつけるよ。」

私は何となく食欲がなくなる。満腹ではないが、今日は比較的涼しいからこの程度で夕方までは体力は持つだろうと弁当の蓋を閉じて腰を上げた。

この現場ではとりあえずレンガの元を運んでそれを練るのが私の仕事だ。単純作業だが王の城を建てるだけあって、国家予算を費やし、働く者からすれば非常に割のいい仕事になっている。

弁当を袋に放り込むと私は作業に戻る。確か休憩前に最後に運びかけたものがこの辺に置いてあるはずだと、それを探した。

「お、あった、あった。」

私とその運び荷に近づいていくと、その傍に全身黒い服を着た大男が立っている。被った帽子の下から鋭い目がこちらを見ている。

私がこの現場に来てから初めて見る男だ。炎天下ではないとはいえ、肉体労働をしている現場で、全身を覆うような黒いマントは、少し暑苦しく感じた。男の目はこちらを見ていた筈だが、あまりに目に生気がないので視線を一切感じなかった。

「ちよつとごめんよ。」

私はとりあえず作業を再開し、そこそこ重い袋を担ぎ上げる。庭師に必要なものは何より体力だ。

その男は何を言うでもなくただじっと佇んでいる。周りはマチマチに昼休みを終えた男達が気合を入れて作業を再開している。季節

柄この国には晴天の日に時々寒い風が吹く。マントをしているからなのか、その男に感覚がないからなのか、周りの者が二の腕を掴んで身震いする中で全く身震いもせず表情も氷の様に固まったままだった。

「変な奴…。」

私は一応気を使つて誰にも聞こえないように呟く。乾いた風に乗つて私の声とその黒い男に聞こえなかった事をほんの少し祈つた。

「さてと…重つ…」

朝の勢いのあるうちにやっておくべきだったと思つたが、仕事だから仕方ない。それに今の仕事は割りもいいが、何よりこの城の庭園をどう組み立てるかという事を考えながら体を動かすという至福の要素が疲れを相殺するという好循環な日々だったので特に不満というものも無かつた。

「いてて…」

とはいえ、ここ数日の突貫工事で結構体はボロボロにはなつていた。少し前までは至極普通の工事ペースで作業していたので割と楽なものだったのだが、今となつては、一度に運ぶレンガも一時期の二倍近くになっている。

ほとばしる汗とともに何とか仕事をこなしていく俺は、何とか夕方解散時間までペースを落とさずに仕事を終わらせる事ができた。「全く、日に日に忙しくなるな。」

「ああ、明日は日没までにノルマが終わるどうか怪しいぜ。」

「まったく、戦争が近いって噂もあるしなあ。」

口々に愚痴る者達を横切つて宿屋への道を真っ直ぐに歩いていく。「ここもそろそろ引き時かもな。」

傭兵経験があるとはいえ、この国の為に命をかけて戦うつもりはさらさら無い。その噂は単なる噂というには余りにも工事に関わる者達に広まっていた。

新興国家だけあつて労働者の大半は、お世辞にもこの国に愛着があるとは言えない。その中でのこの噂である。普通に考えて、覚悟

も自信もないものは報酬日の次の日に消えるパターンが多い。

その為に、報酬を全体で割るという方式が取られた。しかし、それも効果のあるはずもなく、徒党を組んで入れ替わりで報酬を受け取り楽をして儲けるものが現れた。それでも、右肩上がりに周辺の国を併呑していった状況の中で、国はとにかく威厳を懸けて報酬を支払った。ここで出し渋ると、周りの国に実体を勘ぐられる恐れがある。なので、ここに国運を懸けている感がある程の報酬に次々に人が減る一方、増加人員量もそれに追いつくという状態を長らく続けている為、工事自体は一進一退を続けながらも何とか完成予定日に向かって突き進んでいた。

それでも戦争に勝ち続けて国庫は常に潤っていたので、受け取る方は当然として支払う方も誰一人それを気にする者はいなかった。日に日に上がっていく報酬に人の入れ替わりはますます激しくなっていく。

その為に、見知らぬ顔を現場で見たとところで誰も気にしない。勿論私もこれまで何度も見知らぬ顔も見てきた。それなのに何か、あの黒ずくめの男が妙に気になる。

翌日も前日の疲れを残しつつ現場へと足を運ぶ。

「何してるんだ！ボーツとするな！」

突然の叱咤に私は我に帰って仕事を続けた。じんわりと汗の染込むシャツが冷たい風を更に冷たく感じさせる。それがまた疲れた体を冷やして次の行動へのエネルギーを蓄えるようなサイクルが体の中で続いている。それがまた心地良い。

気がついたら夕方になっていた。ここでは、日が沈む前に仕事は終わる。日雇いの金を受け取ると大体の者は夜の街へと消えていく。私は、一人で飲むのが好きなので基本的にはここから先は誰とも絡む事もない。

大きな酒屋へ行くと絡まれる可能性が高いので片隅のバーの片隅の席で1人でぼろ酔うのが丁度いい。

新興の街というものは、どの店も真新しい雰囲気がある。ここは

元々、無人ではなく小さな村だったのだが、今の国王が地理的に適切なのでここを首都にする事を決めて城を建設する事を決めた時から急激に発展してきた。

仕事があると人が集まる。人が集まると仕事生まれる。労働者が溢れるとそれを標的（あまりよい表現ではないが）にして夜の街も発展する。そんな好循環を繰り返し短期間で様変わりした街だ。いつかバーの老人店主が長々と私に語ってくれた話である。

「いらっしやい。」

寂れた看板を見つけて私はドアを引いた。狭い店内には2人の男客がそれぞれバーの隅に座っている。お気に入りの席を取られて仕方なくど真ん中に陣取ると最初の1杯を注文した。

「今日も忙しかったのかい。」

老店主はカクテルを造りながら私に静かに話しかける。このマスターは、ここが小さな村だった時からもう長い間、この土地の遷移を見てきた生き字引だ。

「今日は繁盛しているじゃないか。」

「ははは、そうだな。」

席は全部で丁度十席、いつ来てもこの席が埋まっているのを見たことがない。街の最北端という場所柄もあり良くない。城の位置からすれば、街の繁華街とは少し離れているし、城が完成してしまうとこの辺りはますます寂しくなるだろう。

私は最初の1杯を飲みながら店内を見回す。左隅にいる男はテールを見つめながらバーボンを飲んでいる。視線を移して右側の客を見ると、黒ずくめの服装は間違いなく昼間の男だ。黒い帽子の下に隠れた目は鋭いが生気が感じられない。

しかし、その男の前にはグラスがない。もう飲み終わったのだろうか。だが、あの現場で仕事をしているのであれば、終わって真っ直ぐにここに来た私とほぼ同じ時間に来たと考えると1杯飲み干す時間はないはずだ。

「マスター、あの男は？」

私は、私の目の前にグラスを置いたマスターに小声で話しかける。
「ん？」

マスターは私の指差す方向を一度見ると目を細めて私を振り返る。
「…何？」

マスターは逆に私を不思議なものを見るような顔で聞いてくる。

「いや、だからさ。あの客が…」

私がここまで喋った時、マスターはハッと何かを思い出した様子を
目を見開く。私はそんなマスターの顔を初めて見たので、逆に同じ
様な表情になった。

「君、それって黒づくめの格好をしているだろう。」

「…知ってるのかマスター。」

「そつか…見えてしまったか…」

突然左端に座っていた男が低く威厳のある声で私とマスターの会
話に割り込んでくる。

「見えてしまった…とは？」

私は思わず気になって男に問いかける。

「聞きたいか？」

男は静かにテーブルを見つめていた視線を上げて私の目を見る。
現場では見かけたことはない顔だった。まあ、私が知らない顔など
現場には五万というが。

「貴方は？」

男はその問いかけにニヤリと笑うと、グラスを傾けて残っていた
酒を一気に飲み干す。

「…」

十分程の沈黙が店に流れた。私の問いに男は一度としてまともに
返答していないのだが、男の威厳の前にそれについて全く触れられ
ない。やがて男は静かに語り出す。

「昔…この国には王がいなかった。いや、そもそも国なんてものは

なかった。」

私は丁度一杯目を飲み干した所だったのでマスターにグラスを見せる。いつものお代わりの合図だった。マスターが私のグラスに2杯目を注いでいる間も、その男は話を続けた。

「そんな小さな村にある日噂が立った。」

男は話しながらグラスをマスターに見せる。マスターは私の時と同じ様にそれに答え、バーボンのグラスを棚から取り出した。

「死神が村に現れたという噂。それは、何百年も平和に暮らしてきた村人の中で突然槍が降って来たような噂だ。」

男は注がれた酒を少しだけ喉に流し込む。私も右端の黒ずくめの男も沈黙しながら彼の次の言葉を待った。もつとも、右端の男が私と同じ気持ちだとは何の確証もないが。

「それは、村に来た1人の旅人から始まった。村の宿に何日か滞在する間に、酒場などで接した村人に死神の話をした。やがて、数日後に村人が1人病で死んだ。そいつは、丈夫な男で病の兆候など何も無かったはずなのに、突然、ある日苦しみ出して倒れた。」

「ああ、そんな事もありましたね。」

マスターが男の話に相槌を打つ。

別に長い付き合いではないし私に人を見る目があるのかどうか疑わしいが、マスターは嘘をつくような人ではない。そんなマスターの相槌が胡散臭い男の話にほんの少しの説得力を添えたような気がした。

「そいつは怯えた目で死に際に枕元の家族や見舞いに来た村人に死神を見たと言った。あの旅人が話していた特徴と全く同じ格好をして、別に何かをされたわけでもなく。ただじっとこちらを見ていたという。」

話していた男は、そこまで話すと視線を黒ずくめの男に移す。私もつられてそちらの方を見た。マスターだけは気を使ってか、知らぬ顔でグラスを磨いている。

「……」

黒ずくめの男は帽子の下の目線を泳がせたままじっとして動かない。一見すれば呼吸をしている、生きている様には見えなかった。

私は昼間、工事現場で聞いた死神の噂を思い出した。そして店内の気温が下がったわけでもないのに少し身震いする。「そいつを見たら死ぬ」という昼間の男と、この男の双方の口から出た同じ言葉が私の脳を刺激した。

「大丈夫ですか？」

この時の私は自分ではどんな顔をしていたのだろう。マスターが声をかけたという事は普通に無表情に酒を飲んでいたわけではなさそう。店内に鏡は一切なく、私が自分の顔色を確かめる術は、わずかな灯りに照らされたグラスを覗くしかない。しかし、私には自分の顔を見る勇氣すら無かった。

「その男が死んだ後、村人の間では次々と死神を見たという者が現れた。しかし、その後暫くは特に村で不審な死に方をした者は出ない。やがて、その旅人が村を去り、噂も下火になって村人の中の恐怖が薄れていった。」

これが単なる怪談話なら、普通に酒の肴になっただろう。そんな店のサービスの一環として、この店ぐるみで私を謀っているのではないだろうかとも考える。このマスターが、そんな演出が好みなのかは分らないが、もしそうであれば、もう十分だろう。これ以上続ければ酔えなくなる。しかし、無情にも男の話は続いた。

「そんなある朝に突然始まったんだよ。」

「何が？」

「戦争だ。」

「どこからともなく現れた馬軍が砂煙を上げて朝靄の中から現れ、突然手当たり次第に村人を殺していった。」

その男は私に感想を求めるわけでもなく目の前の何も無い空間を見つめながら淡々と話す。

「その時殺された村人が全員死神を見たのかどうかは確かめる術はない。」

男は私に視線を向けた。

「その話、酒の肴にはちと刺激が有りすぎるのでは？」

私は少し笑って目を泳がせた。男の表情は喜怒哀楽のどれでもない。唯、石像に見られているように不気味さを感じる。

「……」

「……」

それから凍りついたような沈黙が店の中に現れる。マスターのグラスを磨く音だけが、私の耳を擦った。

「つかぬ事を聞きますが、あなたはもしかしてその村の……」

「さてね。」

男は、空になったグラスをトンと置くと、数枚の貨幣を置いて席を立った。男が出て行くと、私は自然と黒ずくめの男が座っていた方を向く。しかし、そこにはもう誰もいなかった。

「もう一杯どうですか？」

マスターの冷静な声で何とか我に帰る。

バーから帰った翌日、私は再び現場で砂袋を担いでいた。昨日聞いた話を頭の中で反芻しながら体は労働に従事していた。

「今日はいいつ来ていないな。」

昼休みにまたあの騒がしい奴が勝手に私の隣に腰を降ろして喋り始める。

「あいつとは？」

「昨日の黒服の奴だよ。」

「ああ、あいつか。」

「お：お前も見えたのか？」

「見えた？」

私は一瞬この男が何を言っているのか分らなかったが、昨日のバーでの男の話が電撃的に頭に走る。今日は快晴なので、滴る汗が思考を妨げてはいたが、昨日の話は私の脳に相当深く刻まれていたら

しい。

「死神の事か？」

「そうだよ。知ってるのか？」

「その話をするという事はお前も見えたって事だな。」

「そうだよ。そういうお前こそ、噂を知ってるんだな？」

男は私の反応に存外食いついてくる。普段は私は、この手の会談めいたものに興味はない。しかし、何故か今回の場合だけは気になつて仕方なかった。

「昨日少し聞いたよ。」

「逃げた方がいいぜ。」

そいつは少し神妙な顔になって私に逃亡を薦めてくる。

「俺は、その死神の話をこだけじゃなくて、以前何箇所かで聞いたんだ。眉唾ものだと思っていたんだが、遂に今回は俺自身が見ちまった。」

「そういう話は何処にでもあるんじゃないのかい？」

「そう思うだろ？、だがな、どの土地の話も死神の特徴がみんな同じなんだよ。だから俺はこいつは存在すると思う。」

軽薄に感じた男の雰囲気が少し変わったような気がした。

「無駄話だな。」

俺は、目の前のそいつだけではなく、自分の中の記憶に向けて一言放つと腰を上げた。

「おい待てよ。」

歩き出した私の後に続いて男がついてくる。

「！」

突然立ち止まった私の背中に男がぶつかってきた。しかし、背中の衝撃の信号は私の脳には一切届かない。

「……いてて、何だよ。」

鼻をぶつけた男が顔を上げて私と同じ視線の先を見る。

「……」

私も男も立ち止まって絶句する。

目の前に大きな木が立っていた。その大きな幹にもたれかかって黒ずくめの男が昼寝をしている。いや、昼寝をしているのかどうかは分らないが、俯いて軽く肩で息をしている。

「見えるか？」

背後から少し震えた男の声が聞こえてきた。私はそれに答えなかったが、言葉にしないで男には十分に伝わったと思う。その黒ずくめの男が何かをしたわけでもないにも関わらず、私の中に何か黒いものが広がっていく様な不快な感覚が呼び起こされる。

ドシン…。

突然の振動に我に帰った私は周りを見回した。

「何だ今のは？」

背後の男も同じ反応で周りを見回す。

「あれは？」

男が指差す方を見るとモクモクと煙が上がっている。始めは気のせいかとも思っていた振動は次第に大きく体全体を震わせた。やがてそれは無視できない程の巨大なうねりになっていく。

「逃げる！」

誰かがそう叫んだ時には、騎馬に乗った無数の兵士が剣を振り上げているのがはつきりと視認できた。

「来やがったか！」

開発中の新興国家にはよくある話だ。特にこの国は周辺国と同盟を結んでいるわけでもなく開発中の隙を伺って攻撃を仕掛けてくる。そして…。

「進め！」

反対側の城の方から聞こえる関の声。

「かれ！」

無論、新興国の方も無防備なわけではない。砂煙を観測した瞬間から対応を始めていたのである。馬に乗った騎士達が既に剣を抜いて構えていた。その先頭を切って敵に突撃していく男の顔を見て、私は目を見開く。

「あれは…バーの…」

「おい、何をしているんだ。逃げるぞ！」

通り過ぎていく避難する人波に飲まれて私は混戦が始まるうとしている場所から離れた。走って逃げる最中もどうしても、馬上の男の事が気になって時々振り返る。しかし、最初に見た時の倍以上の濃度の砂煙の中では、混ぜ合わされた人の影と時々飛び散る深紅の血が認識できるだけだ。

止むをえず逃げながら周りを見回す。あの黒ずくめの男も見当たらない。

私は他の者について城の裏側に回り込む。大勢が城から離れようと街外れまで走り続けていたが、私は立ち止まって造りかけの城壁の隙間に体を滑り込ませる。戦の喚声が鳴り響く城の中へと戻っていった。

普段は、自分の担当以外の箇所は行くことはない為、城の裏庭あたりに踏み込んだのは初めてであった。

先程から続いている振動は戦いの激しさを物語っている。その中で私は見慣れぬ城を徘徊した。正直、私自身も何故この時に逃げなかったのかは分らない。人間は緊急時には衝動的な行動を取る。それが正しいかどうかは結果が出ないと分らない。

1階部分は半分以上は既に完成している。

普通、城は敵に侵入された時の為に複雑な回廊にしてあると聞いた事がある。城の構造を私が理解している筈もなく、ただ当てもなくウロウロと歩いた。不思議と恐怖はない。それが若さかどうかは分らないが、とにかくなるようになるとしか思っていなかったのは確かだ。

「うん？」

突然開けた場所に出る。周りは建物に囲まれていた。中庭だろうか。

「へえ、こんな場所があったのか。」

上を見上げると吹き抜けになっていて、出入口は2箇所、私の入

つてきた部分は小さなくぐり戸だったので裏口という事だろう。正面には見事に開けた街の景色が広がっている。そこから私の働いていたエリアも見える。

「広さも丁度いいな。ここに花を植えて、ここに小川を作って…。」
そこから眺めて見える戦場では、血飛沫が舞っているというのに私は、この箱庭に思いを巡らせ始めた。ここが元々何に使われるはずのものだったのかは分らないが、広さや立地や地面の起伏、周辺を見渡した環境など、まさしく申し分のないこの庭は、しばし私を魅了した。

そうして、どれくらいの時間が流れただろう。

「ん？」

ふと目の前を見ると、小さな岩に、あの黒ずくめの男が座っている。私の心に残っていた恐怖は興奮ですっかり洗い流されていたから、思わず話しかける。

「…あんた…死神なのか？」

「…」

男はとりあえずはこちらを向いたが、口は全く動かす様子はない。
「…ここで何してるんだ？」

私は第二の質問を投げかける。

「それはこっちの台詞だ。」

不意に背後から別の声が投げかけられた。振り返ると赤い鎧に身を包んだ男が剣を持って立っている。

「あ…あんた…。」

「ああ、バーの男か。」

鎧の男は剣を一振り素振りして付着していた血を拭くとそれを鞘に収めた。敵意はないようだ。足取りからしても体に付着している血は全て返り血なのだろう。

「逃げなかったのか。」

「あなたは？」

「ああ、この城の主さ。」

薄々は気づいていた線が繋がる。

王は私の傍まで近寄ると死神のいた木に目を向けた。自然私の目もそちらを向く。

「あ…。」

そこには誰も居なかった。

「まだ、見えるのか？」

「い、いや、もう見えません。」

「そうか。私にも見えない。ところで…もう一度聞くが…」

「はい。」

「ここで何をしていた？」

「い、いや、私は庭師をしておりますて、この場所が気に入りました…。」

別に問い詰められたわけでもないのだが、咄嗟に慌てて出た言葉がそれであった。

「そうか、ここを庭になあ。それもいいかもしれんな。」

王は周辺を見回しながらそう答えた。

「おっと。」

城の振動が私の前に佇む木を根元から揺らせる。私自身もバランスを崩して尻餅を突いた。すっかり足腰が弱くなっている。

揺れは収まる様子もなく私は木にしがみつくようにして何とか腰を上げた。私の傍にはいつの間にか黒ずくめの男がじっと私を見ていた。

「やあ、五十年ぶりだね。」

私の話しかけに男は答えない。

「いや、正確にいうと、三十年くらいだな。ここで会うのが五十年ぶりかな。」

相変らず男は全ての事象に興味がないとばかりに口や眉を何一つ動かさない。予想通りのリアクションに私は苦笑いをするだけだ。

開けた景色の中で街に突然火が上がる。城壁が破られ雪崩のように見慣れぬ鎧が町に流れ込んでくるのが見える。

五十年前とは違って城壁も町も城もすっかり完成していた。この王の住む城は完成してからも今まで何度か攻められた事はあるが、町にまで雪崩れ込まれたのは初めての事だった。

町から流れてくる喚声と嬌声はあまり気持ちのいいものではない。「かれ！」

城門が開かれ、城から王を先頭にして見慣れた鎧が町へと飛び出していく。

「お、お逃げください！」

若い兵士が私の所へ走ってきて背後からそう話しかけた。

「君、この黒い男が見えるかね。」

私は手をついていた木の傍の死神を見ながら若い兵士に問いかける。

「は？」

兵士は不思議そうな表情を浮かべて首をかしげる。

「そうか。なら君だけでも逃げなさい。」

「わ、私は最後まで……」

「まだ君は助かる。いや、私も足掻けば分らんが、もうすっかり体も弱ってしまつたからな。」

「し、しかし……」

若者はまだどうするか迷っている様子だった。こうしている間にも火の手はどんどん城に近づいているのが見える。王の軍隊でもあの勢いは止められないだろう。

「私はこの城の庭師だ。自分の職分を捨てて逃げるには歳を取りすぎた。」

私は嗜める様に若者に話しかける。

「し、しかし……」

この迷いも若さかもしれない。私は苦笑いしながら庭の片隅にある物置を指差した。

「あそこに私の鞆が置いてある。持ってきてくれないか？」

「はい。」

跪いていた若者は直ぐに立ち上がり小屋に向かって走っていく。どんどん小さくなる背中を見て私は正直羨ましく思う。あつという間に若者は古びた鞆を私に持って来た。

どこからともなく火矢が1本飛んできて木に突き刺さる。あつという間に枝葉に火がついて燃え広がってしまう。それを見て私は何とかよろよと木から離れた。

「ふふ、綺麗なものだな。」

火を眺めて呟いた私を若者が不思議そうに見ている。

「君はこの国の生まれか？」

「い、いいえ、私は遠い北の国から……。」

「そうか、なら北門から逃げた方がいいな。ご両親は健在か？」

「あ、は、はい。」

この非常時にする質問としてはかなり異質なもののだろう。若者は仕方なく答えているという雰囲気をかもし出している。

「そうか。なら早く故郷に帰って親孝行する事だ。今の君にはそれが仕事だ。」

「し、しかし、私は王命で貴方の護衛をしているのです。」

「もうこの国は地図から消える。国が消えれば王も消える、だから王命に意味などなくなる。」

「……」

少し前まで確固たる信念を持っていた若者は私の言葉に戸惑っている。王命が無意味だなどと言い放つ私を化物を見るような目で見ている。

「君がもつと歳を取れば、私の言葉の意味が分る日がくるかも知れない。その日まで命だけは大事にきなさい。」

私はここで持っていた古びた鞆一度強く握って若者に渡す。

「これは……？」

「これは私が父から貰ったものだ。君にやるよ。旅には必要だろう。」

「

「し、しかし…。」

「いいから貰ってくれ。私には弟子も子供もない。遠慮することはない。」

少し重い鞆を若者は開いて中を確認する。かつて私が母に渡された時と同じ様なものがそのまま格納されている。この庭を離れるつもりのない私が何故こんなものを用意していたのか…それは自分でも分らない。

「で、では…。」

若者はようやく重い腰を上げて走り去って行った。木に乗り移った火はそうしている間にも庭中に広がり続ける。

「さて、と…。」

私は自分の作り上げた庭が自然に帰るのを見届ける為に庭の裏口へと移動して、火の海になった庭を暫く眺めていた。傍らには死神がじっと立っている。

「この歳になるとお前を見ても何の恐怖も感じないな。」

とりとめもない会話をしたつもりだが、相変わらず死神は沈黙を守っている。

「今日は、よく晴れているから冷たくて乾いた強風が吹いている。敵さんもこの日を選んで攻め込んできたのだろ。五十年前もこんな日だったな…。」

私は真っ赤に染まっていく庭や町を眺めてその場に座り込んだ。体を包んでいく赤い炎に不思議と熱さは感じなかった。

剣

長い旅が終わる。俺の武者修行の旅が…。あと山一つ超えれば生まれ故郷の村である。

「待て、何者だ？」

国境の川に掛かる橋の手前で鎧を着た兵士に呼び止められる。

「何者って、俺はこの国の生まれで今から実家に帰るところなんだよ。」

「そうか通行証は？」

「は？」

俺が怪訝な顔を見ると周りにいた数人の兵士達が集まってきた。

もうこの国を旅立って十年になる。十年前には見送り1人いなかったのに比べてこれは随分と歓迎されたものだ。いつ出来たのか知らないが橋の前に駐屯基地のようなものが出来て、物騒な兵士達がうろろろしているので近づきたくなかったのだが、この橋を渡らずに帰る遠回りの事を考えると止むを得ない。

「この国のものと証明ができるまで通すわけにはいかな。」

「俺は十年も国を離れてたんだ。通行証なんてどこで手に入ればいいんだよ。」

「そうか。お前は知らんだろうが、この国は十年前にクーデターが起こって、王も法律も変わってしまったのだ。」

「そんな事知らないよ。」

俺が国を出てすぐの時期じゃないか。こんなくだらない事で自分の生まれた国に入れないとは情けない。

「とにかく、ここは通すわけにはいかんだ。」

兵士は真面目ぶってインコや九官鳥の様に同じ事を繰返すだけだった。いつの間にか、他に通行している者達も俺の周りに集まってきた。何で帰るといっただけでこんな大事になるのか理解できない。

突然兵士の額当てが光った。晴天の太陽に反射してその光が俺の目を差す。

「いてて。」

俺は目を擦りながらその額当ての模様を見た。俺の知っているこの国の模様とは全く異なっている。どうやらこの国が変わってしまったという事は事実らしい。だからと言ってこのまま引き下がるわけにもいかなかった。

「じゃあ、どうすれば、俺は家に帰れるんだい。」

立腹を露にして俺は兵士に問いかける。

「まったく、本当に何も知らないんだな。」

俺は大きく頷く。兵士はやれやれといった様子で面倒くさそうに説明を始めた。

「いいか、この国は生まれ変わって前みたいな平和ボケではなくなつたのだ。いいか、この国は弱肉強食の法律がある。」

「……？」

俺はまず兵士の言っている事が理解できない。ぼーっと聞いていると兵士は、おもむろに剣を抜いた。

「わっ！」

流石にこれには少し驚いて身を引く。兵士はそんな俺の態度を嘲笑って剣を肩に担いだ。

「この国では私闘が推奨されているんだよ。」

「私闘？」

「ああ、但し、許されているのは、我々軍事関係者、政府関係者と国外の者のみだな。」

「どうということだ？」

「つまり、こういうことだ！」

兵士はいきなり俺に向けて肩に担いだ剣を振り下ろしてくる。とつさにうしろに身を引いて何とかかわす。

「どうした？剣を抜かないと、今ここで死ぬ事になるぞ？」

「何だって？」

どうやらこの国は俺が留守の間にとんでもないことになってしまったらしい。

「どうした、背中に担いだ剣は唯の飾りか？」

兵士は俺を目一杯挑発しているつもりの様だったが、俺は頭にくるどころか、今自分が置かれている状況を理解する為に頭をフル回転させるだけで精一杯だった。

「何のつもりか知らないけど、俺はこの国の人間だ。それに軍事関係者でもない。そしてこの剣は飾りじゃない。俺は鍛冶屋だ。剣を持つていてもいいだろう！」

俺は兵士の横暴に剣ではなく弁舌を持つて答えたつもりだ。兵士は黙って弁舌を聞いていたが、神妙な面持ちになって俺を眺め回す。「それは、本当か？」

「ああ、嘘じゃない。嘘と思うなら調べてみる。この国の東の外れにある村の唯一の鍛冶屋だった俺の親父が十年前に死んでいるはずだ。俺はそれから親父の後を継いで技術を磨く為に旅に出たんだ。家族の不幸の知らせを受けて今日帰ってきたんだ。分ったか？、この国の法律がどう変わったって、家に帰るだけの人間に剣を向ける理由なんかないだろうが。」

「ふーむ……」

兵士は暫く考え込んだ。こんな簡単な常識を考えないと分らない風になるこの国の法律に大きな問題があると思ったが、今はそんな挑発的な言葉を投げかけるわけにはいかない。とにかく無事にこの川を渡る事が先決だ。

「分ったら通してくれ。結構急いでいるんだ。」

「……なるほど、なら一つ条件がある。」

「は？」

「この俺の剣を鍛えなおしてくれ。」

兵士はさつきと一転して剣を俺に差し出してきた。俺は「急いでいる」と言っただけはずなんだが、どうやら人の話を聞かないタイプの人間のようなのだ。

「分ったよ。ただし、この国を出る時だ。俺は今、急いで故郷に帰らなければならないから用事が終わったら必ずここに来てあんたの剣を鍛えなおしてやるよ。」

「……」

兵士はしばし考え込む。確かに口約束だが、前向きに善処してくれているようだ。

「よし、分った。約束は破るなよ。」

兵士はあっさりと承諾して剣を鞘に収める。俺の意外な反応に気づいた兵士がわけを話す。

「この国はな、この法律のおかげで1兵卒に至るまで急速に強くなったから周りの国から睨まれてるのさ。だから、食料を生産する農民と武器を生産する職人が何より厚遇されているんだ。お前さんの言う村には行ったことはないが、まあ、職人つてのは信用してやるよ。この国で農民と職人を殺せば、厳罰になるからな。」

何ともまあ、無駄を削いだというか、大分偏った思考の王様のようだ。

「行けよ。約束は忘れるな。」

兵士は一変してあっさを道をあける。その脇を通って橋へと歩いていく俺。

「気をつけるよ。俺みたいに物分りがいいやつばかりじゃないかな。おっと、一つ言い忘れてたが、この国は、この法律のおかげで王が結構この十年で何人か入れ替わったらしいぜ。私闘の範囲に王も入っているからな。勝ったものには全てが与えられる。この国では王のシンボルは冠じゃなくて、国のシンボルを彫った剣だよ。」

橋に向かって歩いている俺は、背中から聞こえる狂気じみた話に少し身震いしながら橋を渡りきった。橋を渡った門の上には新しい国のシンボルマークの模様が刻まれている。

これも十年前にはなかった新しいものだ。しかし、あんな話を着た後では血生臭い模様にしか見えない。俺はそそくさと入国した。

余計な事で時間を食って、日は暮れてきたのでこの辺りで俺は宿を取る事にした。生まれ故郷であるがゆえにこの辺りの山が危険な事は良く知っている。

熊や蛇から山賊まで、命と荷物を失う要素がやたらと存在する。

「疲れた…。」

まあ一日くらい遅く帰っても別に構うまい。山の麓の集落には旅人を泊める宿が何軒か軒を連ねている。この辺りの街道はこの国の新しい王様が輸送道の整備の為に工事して直したらしい。ここを通ること自体久しぶりだが、俺が旅を始めた時はこんな集落自体存在しなかった。

「空いてる？」

暖簾をくぐって声を掛ける。

「すみません。うちはいっぱいでして…。」

奥から出てきた宿の主は手を揉みながら笑顔で残念な返事を切り返す。

「なんだよ。ちえ。」

無論、俺の方は笑顔でそれを返すわけではないが、空いてないのであれば止むを得ない。何軒かそうやって回ったが、どこも満室でとりつくしまもない。

「仕方ないなあ。」

途方にくれて道端に座り込んでいた。

ふと、何気に顔を上げると街道の反対側に誰かが立ってこっちを見ている。帽子から靴まで真っ黒いものを揃えているから、薄暗い中、今まで気づかなかった。しかし、そいつは確実にこちらを見ている。

「？」

じろじろと見られている割には全く覚えのない顔である。こちら

から話しかけるのも何か違う気がして、俺は気づかない振りをするのが一番良いと判断した。

「うーん。」

立ち上がった背伸びをする。さて、今夜の宿はどうするか…。強行軍で帰るという手も考えられるが、それも何か面倒くさい気がする。よし、あと1軒だけ覗いて、それで駄目なら…、その時考えよう。

「すいません。」

俺は最後の暖簾をくぐって声をかけた。奥から出てきた髭の主人が手を揉みながら笑顔で答えるのだが、同じ笑顔を何度も見てきた俺にとっては、また「一杯で…」という言葉が飛び出すと思った。

「えーと、相部屋でよければ…」

「えーと…」

意外な答えに俺は迷いを露にする。このまま、野宿や強行軍を選択するよりはマシだと思い、仕方なく「それでいい」と返答した。

「ではこちらへ。」

腰を低くした髭主人は俺を宿の中へ導く。階段を上った2階の一番奥の部屋の前まで来ると髭主人はドアをノックする。

「はい。」

低く野太い声が部屋の中から聞こえてくると、髭主人はドアを開く。

「失礼します。」

部屋に入ると、髭主人よりもさらに髭の濃い中年の男が鞘から抜いた剣の手入れをしていた。片目は大きな傷が塞いでいる。

「すみません。今日は大変に混み合っていて…相部屋をお願いできないでしょうか。」

「私は構わないよ。」

野太い声が快く提案を承諾する。

「失礼します。」

俺は部屋に入り、テーブルを挟んで男の向いに腰掛ける。男は俺

を一向に気にせず、剣の手入れを再開した。大分、使い込んでいるようだったが、手入れが良いのかまだまだ切れ味が衰えている様には見えない。

「いい剣ですねえ。」

沈黙が嫌なので俺は何となく話しかけた。男は手を休めてこちらを見る。

「そう見えるかね？」

「はい。俺はこう見えても鍛冶屋なので。」

「ほお。それは丁度良かった。この前の戦で使い込んでしまつてな。この山の向こうに腕のいい鍛冶屋があると聞いたので来てみたのだが……。」

この辺りで村があるのは俺の村だけだ。それに村に鍛冶屋はうंचीかない。親父は元々有名だったので間違いなく親父の事だろう。なるほど、でもその鍛冶屋はもういないですよ。」

「何？、そうなのか？」

「はい。」

「そうか。いないのか……。」

男は顔を曇らせて本当に残念そうな顔をする。俺が村にいた頃から、何人かの名のある剣士がうちを尋ねてきた事があるが、これからは俺が対応しなければいけないと思った。

「俺で良ければどうぞ。」

「そういえば君も鍛冶屋だったな。」

「はい。親父程ではないけど、まあ、それなりに修行は積んでいます。」

「ふむ、それではお願いしようか。」

「毎度、じゃ、少し拝見。」

俺は男から剣を受け取るとじつと観察する。修行中に見たどの剣よりも間違はなく名剣だった。もはや芸術品の域に達していると思われる刃芯を見ると、これ以上何をどうしようというのだろうと思う。

ただ男の言うとおり激戦を潜り抜けた跡なのか、多少の刃こぼれはあった。

「どうだ。何とかなりそうか？」

「はい。とりあえず、ここでは何なんで工房に行ってからですね。」

「工房？、それは何処に？」

「ああ、山の向こうですよ。」

「そうか。では、今日はもう休む事にしよう。」

工房に行ってもどうなるものか分らないが、俺も鍛冶屋の端くれだというプライドで適当な返事をしてしまった。まあ何とかなるだろう。

十年前に親父が亡くなり、祖父が家業を廃止すると言い出した時、俺はそれに反対した。親父は病で死ぬには早すぎる年齢だったので俺はまだ後を継ぐ技術を十分に引き継いではいなかった。祖父はまだ健在だったが、家業を続ける体力は残っておらず、このまま続ける事は困難な状態だった。

しかし、俺は諦めなかった。この狭い村では他に鍛冶屋の技術を学ぶ事はできない。俺は家族を説得して旅に出る事にした。何年かかるかは分らないが、武者修行の旅だ。正直俺は生まれてからこの村を出たことがない。だから、これを理由に旅がしてみたかった。修行は真面目にするつもりだが、それよりも、旅をするという行為に高揚した気持ちの方が強かった。

「なるほど、で、修行を終えて戻ってきたというわけだね。」

俺の話を黙々と聞いていた男は相槌を打つ。

「いや、終えたわけではなくて、祖父がなくなっただという知らせを受け取ったもので。」

「そうか、それで一時帰省という事か。」

「はい。」

「だが、そんな時にお邪魔してよろしいのかな。」

なかなか良識のある人ようだ。

「仕事であれば問題ありませんよ。」

山道も中腹に差し掛かってきた頃に少し休もうという事になり、俺達は景色のよい岩肌に腰掛けて休んでいた。

「剣士さんも各地を旅してるんですか？」

「いや、それほどウロウロしているわけじゃないよ。」

「そうですか。」

いい天気だ。日向ぼっこをしているうちにまた歩くのが面倒になると嫌なので出発しようと腰を上げた。

カチン。

足元で何か音がした。

俺がそれが何かを確かめようと身を屈めると、今度は頭上で金属音が響く。

「そのまましゃがんでろ！」

剣士の声で思わず体が硬直する。そして、引続き聞こえる金属音が起こっているのか分らないままにとりあえず指示通りはいくばつて身を低くする。僅かに首を上げる俺の視界には無数に飛んでくる短刀を見事に剣で叩き落としているのが見える。

一体何が起こっているのか分らないまま、暫くして短刀が飛んでこなくなったので腰を上げて周りを見回した。

「すっかり囲まれたな……。」

「え？」

剣士の呟きに背筋が凍る。それと同時に周りから十名程の簡易鎧を来た刺客が飛び出してくる。鎧と言っても胴体の正面に申し訳程度にあてがった板に見慣れぬ模様が描かれているものだ。

俺は、修行中に人に恨まれる様な事をした覚えはない。

「くそ……。」

背中に背負っていた剣を抜いて構える。それでも1人で物騒な世界を回っていた手前、多少剣術には覚えはあった。俺は剣士と背中

あわせになつて戦闘態勢に入る。

「貴方、心当たりはあるんですか？」

とりあえず小声で聞いてみる。

「すまないな。」

謝られてもこの状況になつてしまった以上は仕方ない。とりあえず、殺気をばら撒いていた刺客達が一斉に飛び掛ってくる。俺は目の前の1人に向かつて飛び掛る。激しい火花ととも力づくでそいつの体ごととはじき飛ばした。重い槌を一晚振り続ける事もある。それに比べれば一瞬に人間を飛ばす力は十分に備わっている。追撃して何度か切りかかるが見事に払いのけられた。

まあ本職でないとはいえつくづく剣士の家に生まれなくて良かったと思う。剣を止めるところらがやられるという思いにかられ必死で剣を振るつた。向こうも俺の隙を伺っていただろうが、素人ゆえにその剣筋を読めずに戸惑っている。

「当たれ！」

思わず言葉にした瞬間に向こうの体に剣が突き刺さる。願つてみるものだと思つたら、その剣は俺のものではなくて剣士のものであった。

「大丈夫か？」

剣士に肩を叩かれて我に帰り、気づけばかなり息が上がっていた。た、助かった。」

剣を扱う職業とは言え、生まれてこの方、正式な剣術など習つた試しがない。

剣士が鞘に仕舞う前に剣を一振りすると、予想外に生々しく新鮮な返り血が足元の岩肌飛び散る。それを追つた視線を背後に向けると、先程まで人間離れした動きを見せていた刺客達が物言わぬ屍に変わり果てている。

「何なんだコイツら。」

「おそらく隣国の暗殺者というところだろう。」

剣士は鞘に剣を仕舞いながら抑揚のない淡々とした口調で答える。

「あんた何者なんだ？人に恨みを買っような事してんのか？」

「そうだな、まあ気にするな。」

そう言われても気にしないわけがない。この後も俺たちはあんなのに狙われ続けるのだろうか。本人はまるで虫を追ひ払う様に日常茶飯事の様な態度だが、俺は激しく動く心臓を落ち着かせるのに、もう少し時間がかかりそうだ。

「先を急ごう。この辺りの獣が血の匂いを嗅ぎ付ける前に。」

既に匂いを嗅ぎ付けているカラス達が鳴きながら頭上を徘徊している。もはや獣がどうかという問題ではない様な気がするが、とりあえず言われるがままに剣士の後について岩から降りた。

正直この時点でこの災いの塊の男を村に連れていくのかどうか迷っていた。このままでは村が襲われかねない。

「まだ距離はあるのか？」

剣士は振り返りもせずに関いかける。返事を返す前に剣士の背中越しに道端に誰かが立っているのが見えた。薄暗い森の中で黒一色の服装なのでとても見えにくいだが、そいつは確かにいた。

剣士もその存在に気づいたらしく、背中から殺気がみなぎったような気がした。どうやらこちらから仕掛けるかどうかを迷っているようだ。俺はよく分からないが、こういう時には達人同士は水面下で高度な駆引きを行なっているのだろう。

「……」

俺達は素人でも分かる程の緊張感を身に纏って黒ずくめの男の前を通り過ぎる。特に真横を通過する時の鼓動の速さは生涯最高の速さだった。

しかし、そいつは全く我々に反応を示さずにその場を一步も動かない。逆に生きているかどうか怪しい程に指一本ピクリとすることも無かった。

「……」

振り返って男の姿が見えなくなった時に始めて身体中の皮膚から汗が滲み出てきた。それと同時に何か頭に引っかかっていたものに

気づく。

「あいつ、宿の集落にいた奴だ。」

宿の集落からここまで来る険しい道を我々より早く辿ってきたのか。

「知っている人物なのか。」

「とんでもない、あんな不気味な奴は知り合いにはいないよ。」

剣士の問いに俺は首を大きく横に振った。だが二度も見てもうと、三度目が頭にちらつく。かなり距離が開くまで気が気ではなく、背中に神経を集中させていた。

ようやく安心した頃に目の前に不気味に立ち上る煙に気づく。

「む、村の方だ。」

「何っ！」

もうすぐ辿り着く筈だった村の方向である。思わず駆け出した俺に続いて剣士も地面を蹴る。

剣を精錬する時の煙に似てはいるが、親父が亡くなった今、村にはそんな事をする者は一人もない。最悪の状況が脳裏に浮かぶ中で、久し振りの家路を急いだ。

「待て！」

不意に俺の前に剣士が立ちはだかる。

「どいてくれ！」

「落ち着け、良く見ろ！」

気がつけば俺達は村を一望出来る小高い丘にいた。そこから見える、かつて村があつたであろう場所はほとんど平にならされて、焦げた臭いが鼻をつく。

「そ、そんな馬鹿な。」

足元から魂が抜けていく様に膝を地面につく俺は、剣士に支えられて何とか上半身は起こしたまま、絶望的な景色を瞳に映していた。

「国境が近いとはいえ、まさか奴らがこんな所にまで来ているとは…。」

俺は剣士の呟きを殆ど上の空で聞きながら、眼前で赤々と燃えている火を見つめる。勝手知ったる我が家は何とか半壊状態だった為に雨露くらいは凌げるだろうと、とりあえず一晚ここで過ごす事にした。

「これからどうするか…だな。」

顔を上げると剣士が俺の目を見て核心な問い掛け。確かに一番最初に考えなければならぬことかもしれないが、今日はもう色々起こりすぎて思考が停止してしまっていた。

「あなたこそ、すいませんね。これでは仕事になりそうにないな。」

俺は頭を掻きながら精一杯冷静を装うが、おそらく剣士には心中露になっていたと思う。

「確かにそいつは困ったな。」

俺の真似をしたわけではないだろうが同じ様に頭を掻く。俺は少し小さくなった火に瓦礫から取った破片をくべた。火は少し大きくなり俺達の周りを照らす範囲を少し広げる。

「あ。」

「どうした？」

口を開いて明かりと暗闇の境界を見ていた俺の目に人の形が飛び込んでくる。おそらくは大分前からそこに立っていたのだろうが、火をくべるまで全く気づかなかったのは、そいつの格好が黒一色だったからだろう。

「またお前か…」

剣士は剣を抜きもせず立ち上がる。殺気が感じられないことが今度は俺にも分かった。もしかしたら、こいつはただ道に迷っただけかもしれない。

「そんなとこに立ってないで、こっちに来て座ったらどうだ？」

何で俺が気を使うんだ？と思いつながら声をかけてみた。

黒ずくめの男は、俺の親切に素直に従い、歩いてきて火の脇に腰

掛けた。

「……」

そいつは何も言わずにただじつと火を見つめている。少しの間、俺も剣士も口を閉ざして沈黙が訪れた。時々俺が瓦礫から取ってきた木片を火にくべた時のパチパチという音だけがやたら大きく耳をくすぐる。

「剣を見せてもらえないでしょうか……」

別に沈黙に耐え切れなかったわけではないが、俺は剣士に何気なく話す。剣士は黙って鞘のまま剣を差し出してきた。俺は鞘を抜いて焚火の明かりで刀身を照らした。

目を細めてよく観察すれば多少の刃こぼれは目立つが、ゆらゆらと揺れる火を映したそれは名剣と呼ぶに相応しい色艶を出していた。なるほど、この剣を作ったのはかなりの名工だ。俺の中でくやしい感情が少し頭をもたげてくる。

旅の中でも数々の優れた武器を見る度に沸き上がる気持ちに対しでは、それを糧にするようになるまでには随分と足を引っ張られたものだ。揺れる火を鏡の様に映すそれを眺めていると、思わず槌に手を伸ばしそうになる。

「……そういえば、あっちの方に残ってた小屋は？」

そんな俺の心情を察してか、それとも無視してか、剣士が不意にある方向を指差す。

「小屋？」

俺は暗闇を見つめながら記憶を辿る。焼け残った小屋とは、それは幼い頃からよく知っている父の仕事場だった。そうか、まだあの場所は焼け残っているのか。

心の中では迷っていたが、思い切って口を開く。

「もう一晩ここに留まりませんか？」

「よからう。」

剣士は全てを見透かしていた様に即答する。それを待っていたのかと思えるほど、答えた瞬間に雲が晴れて月の明かりが焚火の円灯

の外の風景を照らし出す。そこには確かに見慣れた工房が原型を留めていた。

「仕事しろってことか…」

俺は剣を持ったまま立ち尽くして、すぐには動けなかった。迷いを見透かしているのか、剣士だけではなく黒づくめの男も俺の顔を凝視している。まるで次の一步が人生の分岐点かのような緊張感が辺りの空気を凍らせていた。

「…」

沈黙する三人。虫の鳴き声だけが辺り一体に響いて満月はますます明るく地面を照らしている。

「分かったよ。」

誰に対して言った言葉なのかは分からないが、とりあえず俺の足は意思とは無関係に前に移動し始める。一步小屋に近づく度に体が重くなっていく様に感じた。

小屋の戸を引こうと手をかけた途端、それはボロボロと崩れ落ちた。流石に無傷というわけにはいかないか。

中に入ると記憶の中のそのままの風景が広がる。竈に火こそ入っていないものの見慣れた道具が、窓から差し込む月によって不気味に光っていた。

それらの道具を一つ一つ手に取って確認する。使う者が居なかった事が幸いしたのか、一通りは村を出る時に最後に手入れした状態を保っていた。

「どのくらいかかる？」

まだ作業を始めるとも言っていないのに、入口付近の壁にもたれて腕を組んでいた剣士が質問する。

「こ…」

俺は即答しようと思っ喉から声を出しかけた。しかしその声が剣士に届くことはなかった。

「がはっ…」

「？」

突然喀血したかと思うとそのまま目を見開いたままうつ伏せに倒れ込んだ。

「な…」

今度は俺が目を見開く番だった。何が起こったのか理解できるまでの数秒間、剣士の背中が当たっていた部分の壁から突き出た剣と、倒れた剣士の背中から溢れ出してくる血を交互に見ていた。

やがて入口に現れた人影で我に帰る。

「貴様はこの者の縁の者か？」

個性の特定出来ない低くて地獄から響いてくる様な声。俺は妙に冷静に答える。

「俺はこの村の鍛冶屋だ。この男は客さ。」

「そうか、もう一つ質問だ。お前は死神を見たか？」

「何の話しだ。」

「そうか、ならいい。」

薄暗さで表情は分からなかったが、そいつが何となく笑った様な気がした。その姿が、かき消す様に消えると、いつの間にか壁から突き出していた剣も消えていた。

それから俺は暫くは動けないでいた。相変わらず虫の声だけが空気を振動させている空間で、ひんやりとした夜風が戸や窓から吹き抜けていく。

何がきっかけというわけでもなく、俺の全身から汗が噴き出してきた。そして外に出ると、赤々と燃えている焚火の場所まで走った。そこには消えかけた火以外に動いているものなど何一つ無かった。

そこにじつと座っていた黒ずくめの男も影すら見当たらない。さつき剣士を殺した奴と関係があるのだろうか？

— 先ずその場に座り夜風で汗を乾かすと、ようやく頭が回転し始めた。

「まずは休むことだな…」

誰に言うともなしに呟くと寝袋に滑り込む。誰かは知らないが、俺を殺すつもりならさつき殺しているはずだ。だからもう命の危険

はないと思う。いや、そう信じよう。

あの黒ずくめの男が刺客だとしても剣士が死んだ途端に姿を消したという事は目的が達成された何よりの証拠だ。気休めかもしれないが、俺は必死に自分の安全を確認しながら目を閉じた。

朝日の眩しさで目を覚ました。まだくすぶっていた焚火の焦げ臭い臭いが鼻をつく。頭上を見上げると雲1つ無い空に輝く陽射しで少し目が痛い。

細目になって周りを見渡すと昨夜の事が夢では無かった物証があちこちに散乱していた。明るくなって改めて見ると、俺が知っている村など何処にもない。ただ、何とか形を保っていた工房がもの悲しげに建っていた。

小屋に近づくと、外れた戸から小屋の中が見える。昨日うつ伏せに倒れた剣士が今にも起き上がりそうに生々しく目に飛び込んできた。

「墓くらい作ってやるかな……」

剣士の遺体を抱えて小屋から出すと小屋の脇の木の根元を掘り始める。

「くそっ！」

墓穴を掘りながら俺は急激に口惜しさが込み上げてきた。理由などはないが、何でこんな目に合わなければならぬのだという思いが穴を掘る手に余分な力を注ぐ。

「くそっ！」

呪いの決め文句を掛け声の様に繰返す。あっという間に二人分は埋められるであろう、かなり大きな穴が足元で口を開けていた。

「まあこんなもんか。」

穴掘りは専門外とはいえ割りと立派な穴が出来た。もう一度剣士を抱えて移動を始める。

「ん？」

少し進むと足元に何か光るものが落ちた事に気づいた。剣士の持ち物なのだろう。それは何かの模様の入った小さな袋だった。一旦剣士の体を地面に置いて拾い上げる。少し後ろめたい気持ちもあったが、好奇心も手伝って袋を開けてみた。

少しの貝貨に混じって何か光る貝貨が1つ入っている。

「何だこれ？」

取り出して太陽に翳すとそれは、太陽の光を倍増して目に入れた様になりに神々しさを放っている。他のものとは色艶が一変しているものであった。そこに描かれた模様には何処かで見覚えがあった。俺は、その場に暫く立ち尽くしてどうしようか迷ったが、貝貨は葬式代だと思い頂くことにした。

剣士の死に関しては俺に責任は何もない筈だ。

「さてと、それじゃあ運ぶかな。」

再び剣士の体を引きずって穴の中に落とす。多少荒っぽいが、まあ勘弁して貰おう。結構な時間をかけて丁寧に土を盛る。さて、あと問題は墓標だ。俺はこの時点で、剣士の名前を聞いていなかった事に気づく。

「ふむ。困ったな。仕方ない…。」

俺は考えた末に木に「名無」と刻んだ。何もないよりはマシなはずだ。その場で一礼して小屋に戻る。そこには道具一式と剣士の残した名剣がまだあった。俺は再び剣を鞘から抜いてじっくりとそれを眺める。

「ん？」

剣の柄の所に先程の袋の中に入っていた模様入りの貝貨にとっても良く似ている模様が刻み込まれている。

「あ…。」

俺はほどなくして入国した時に見たこの国の新しいシンボルだと気づく。そしてあの兵士の言葉…。

「まさか…。」

あの兵士の話が本当だとすれば、下克上を狙って部下が王を暗殺したとも取れる。しかし、そうなるとその剣を置いていった理由が分らない。やはり、この国の人間ではないのだろう。

それはそうと、この剣を持ってこの国をウロウロするわけにはいかない。王の称号である剣を持っているという事は俺が今はこの国の王という事になる。

「そ、そんな馬鹿な…。」

自分で言っただけ馬鹿馬鹿しくなるが、兵士の話が本当なら別段不思議な事ではないだろう。しかし、命には変えられないのは分っているものの、これだけの名剣を手放すには、1人の鍛冶屋として余りにも惜しい気がする。

「うーん。」

美しい剣を眺めながら、俺は雷に打たれた様に一つの事を思いつく。

「そうか…。俺は何の為に鍛冶屋をやってるんだ…。」

夜の戸張が降りても俺の作業は終わらない。竈に火を入れてからもう数時間が経過した。流石に誰も使っていなかった工房だけあって直ぐには作業に取り掛かるわけにはいかない。とりあえず、準備で半日以上は使ってしまった。一休みしようと夜風の吹く外に出た時には、昨日と同じ様に煌々とした月がすっかり夜の顔になっていた。

昨日焚火した跡付近に立って空を眺める。大きく深呼吸した俺の目に突然黒い人影が映った。

「なっ…。」

それはあの黒ずくめの男だった。彼は、木の陰から黙って俺の方を向いている。

「あ、あんた。まだいたのか。」

黒ずくめの男は木陰から月明かりの下に進み出る。だが、相変ら

ず口が動く気配はない。

「何をしに戻ってきたんだ？、ここに何も無いぜ。」

俺は刺激しない様に出来るだけ友好的に話しかけた。何せ相手は、王を暗殺した犯人かも知れないのだ。

「…。」

一瞬で話題は尽きて沈黙。まあ、2、3回会った事があるだけで、俺はこいつの声さえ聞いた事がないのだ。

「もう一度聞くけど、俺に何か用なのか？」

男は答えない。暖簾に腕押しなのを悟った俺はそれ以上話すのをやめて工房に戻ることにした。

工房にはすっかり準備が整い俺の仕事は今か今かと待っている道具がずらりと並べられている。人の気配を感じた私は顔を上げると目の前に黒ずくめの男と違う影がそこに立っている。

「誰だ！」

窓から除く月光だけでは、そいつの顔は確認できなかった。

「俺だよ。」

「俺？」

十年ぶりに戻ってきたこの国で、村の連中以外に知り合いなどいる筈もない。「俺」と言つて分る人物など…。

「お前は…。」

その男が一步進み出て顔が月光の下にくる。その顔を見て、俺はそれが、入国した時の兵士である事にようやく気づく。

「何でここに。」

「お前が東の村って言ったんじゃないか。」

「そんな事じゃなくて、ここにいる理由を聞いているんだよ。」

男はニヤリと笑って俺に近づいてくる。

「その剣は何処で手に入れたんだ？」

「何だと？」

俺との距離が近くなる程、男の表情が強張ってくる。

「その剣がどうしてお前の手にあるんだと聞いているんだ。」

「……」

俺は男との距離が縮まる度に距離を保とうと後ろに下がった。

「お前は、民間人だ。その剣を大人しく渡せば命だけは助けてやる。」

俺の背中が壁に当たってそれ以上は後に下がれなくなった。

「ま、待て！、俺は今からこの剣を鍛えなおそうとしていたんだ。」
男の足が止る。

「鍛えなおす？」

「そうだ。この剣の持ち主は俺にそれを依頼してから死んだ。俺は王なんかに興味はない。だからこの剣はあんたに譲るよ。ただその代わり、依頼は完遂したいんだ。頼む。3日いや、2日待ってくれ。」

男は立ち止まってじっと俺の目を睨む。恐らく頭の中では色々な打算が働いているんだろう事は容易に想像できる。

「……分った。だが、俺もここで待たせて貰うぞ。」

俺は何とか命を繋げた。

赤く焼けた鉄を鍛える瞬間は無心になる。こんな状況でも、それは変わらない。

カーン、カーン。

その音は俺の心臓を撃つ様に自分の鼓動にあわせて響き渡る。今、俺にとっては世界にこの音しかない空白に近い瞬間。雑念を捨てられる様になったのは、いつからだろうか。形を変えていく剣をただ無心で見ていた。元々が名剣だったのに今この剣がどの世に生まれ変わるのかは、俺自身にも分らない。

「ぐ……」

汗が目に入る。それを拭き取る時、一瞬だけ我に帰る。そして直ぐに無の世界へと入っていく。

どの位経ったのかは分らない。しかし、出来上がった剣を水につけるとジユウという音が耳をくすぐると、とりあえず我に帰る。

「ふう。」

大きく息を吐き出して頭に巻いていた手拭を外す。用意していた柄に刃を取り付けると鞘にピタリとはめて作業を完了させた。手拭を外して、何気に絞ると大量の汗が床に滴り落ちた。壊れた戸から外に出ると、月が同じ場所に光っている。

「終わったのか？」

男が1人近づいてきて俺に話しかける。

「ああ、終わったよ。」

「さつさと渡せ。」

俺がゆっくりと手に持っていた剣を差し出すと、男はそれを筆取り取る。

「ところで、あいつは誰なんだ？」

男は近くの木の根元を指差して聞いてくる。俺はその方向を見たが、その指先には誰もいない。

「さあな。知らないよ。」

「まあいい。これで俺がこの国の王だ。」

男は薄ら笑いを浮かべると剣を握って走り去る。

俺は、男が指差していた木の根元に歩み寄ると何も見えない木に向かつて話しかけた。

「お前、死神だろ？」

「……」

無論返事はない。そこにいるのかどうかも分らないが、俺は言葉を続ける。

「俺にはもうお前が見えない。これで俺は助かるんだろうな。何をしたら助かったのかは知らないが、あの男はもうすぐ死ぬんだろ？、この国の王が、あんな馬鹿じゃこの国は死んだも同然だな。」

俺は少し笑って小屋に戻った。そして更に一本の剣を持って小屋を出る。俺はその剣を最初に埋めた男の墓標として木の根元に突き

立てる。

「俺は王なんてのに興味はないんでね。」

それは、男に渡したダミーの剣ではない本物の剣だ。俺は一度手を合わせて焚き火の場所に戻り荷物を纏めた。もうこの国に未練はない。

俺はそれから旅に出て他の国で鍛冶屋を開いたが、程なく生まれ故郷の国の滅亡の話を風の頼りに聞く事になる。

遠くへ

人間ツイてない時は徹底的に重なるものだ。仕事が忙しいのは悪いことではないが、度が過ぎれば精神的に参ってくる。ようやくとれた休みの日も特に何をするでもなく家でゴロゴロするだけを繰り返していた。

会社に親しい人がいるわけでもなく、無論彼女や友人などという人物関係は俺の周りには存在していない。だから、人に恨まれる事もなければ喜ばれる事もない。

そんな無味無臭の人生に疲れた俺はどうしても一人になりたくて人生初の「無断休暇」というものをしてみる事にした。更に家に居ても仕方がないので、これも人生初になるが旅に出ることにしてみる。

計画と呼ぶほど大袈裟なものでもないだろうが、とりあえずネットで地図を眺めてみる。飛行機や新幹線などは本当に数回しか乗ったことはないし、予約の仕方もなく分からない。車もバイクも無ければ運転免許も持っていない。この乏しい移動手段で何処まで行けるのか…。

何も自分を変えたいとか、そういうつもりはさらさら無く。ただひたすら突発的に思いついただけの旅だった。

そうこう考えているうちに就業終了の時間がきた。

「お疲れ様です。」

一応挨拶はしたつもりだが、周りからは何の返答もない。まあいつもの事だ。就職してから何年も飲み会や食事に誰かに行った試しはないが、仕事に関してはきちんとこなしているつもりだ。リアクションがないという事は裏をかえせば、俺の仕事ぶりに問題はないと受け取っている。

都合のいい解釈かもしれないが、そうでもしないと精神的にもたないのだ。まだ明るいうちに会社を出て電車に乗る。誰一人、明日

俺が会社に来ないなどとは思っていない。サボり癖のある人にはよくある日常かもしれないが、俺にとってそれは大事件なのだ。

荷物を纏める為に一旦家に帰る。散らかった部屋の中から取りあえず一番大きなリュックを引っ張り出す。旅行など行かない俺に両親からの就職祝いだが、一度も使った事がない。

具体的には何が必要かもよく分からないが、着替えや携帯電話の充電器くらいは必要だろうと、思いつくまま適当に詰め込んだ。詰め込み終わって外を見ると、すっかり日は沈んで星が見えかけていた。

家を出て駅に向かう。途中で空を見上げると、真ん丸い月が俺を笑っている様だった。最寄の駅前には商店街への入口があり、居酒屋などが軒を連ねている。まだ平日だというのに何人ものスーツ姿のサラリーマンや大学生らしき私服の若者が入れ替わりに店に出入りしている。

賑やかな繁華街も俺にとっては、あまり嬉しい町ではない。街灯の光が映し出す彼らの紅潮した顔もあまり好きではなかった。

目的地は考えていなかったが、一先ず定期を使って改札をくぐった。会社までは無料でいけるが、こんな時にまで、いつもの見慣れた通勤風景を見るのも嫌だったので、ホームに降りた後に、会社とは反対方向の電車に乗る事にした。

「えーと、こっちか。あ…。」

慣れとは恐ろしいもので、危うくいつもの方向の電車に乗りそうになったが、何とか思いとどまってホームの真ん中のベンチに座る。1人溜息に身を任せて壁に張られてあるポスターを何気に眺める。次の電車までまだ五分あった。何もすることがない時の五分は長く感じるものだ。

少しでも空いている方がいいな。そうだ、先頭車両が最後尾なら座れるかもしれない。退勤ラッシュの時間はとくに終わっていて、いつもの電車より空いている事は予想できたが、席に座れる事を期待して、念には念を入れようと席を立て移動した。

ホームには誰もいない。いつもは、ホームに降りて最初に到着した電車に乗れない程混雑している見慣れたホームが、まるで別の空間の様に思える程、俺にとっては異色の景色だ。この駅のホームはこんなに広かったのか…。

端まで来ると五人掛けのベンチの隅に誰かが座っている。

「あれ？」

さっきまで誰もいなかった様にも見えただが…。まあ、俺もボーツとしているから断言は出来ない。更にそいつはまるで気配がない感じがしたし、服装も帽子から靴まで黒一色の格好だったから尚更目立たない。

男は寝ているのか起きているのか、深々と帽子を被り足を組んで手をポケットに入れてじっとしている。ただ、微かな体の揺れで息をしている事だけは分った。それがなければ死んでいるんじゃないかと思える程にそいつからは生気が感じられなかった。

まあ俺も似たようなものかもしれないが。

男が座っているのと反対側の端に座って電車を待つ。電光掲示板には電車遅延の情報は流れていないので、時間通りならもう直ぐ来るはずだ。

いつの間にかホームに一人降りてきていた駅員が旗らしきものを振っていた。先頭車両付近に座っていた俺の目にゆっくりと進んでくる電車の強烈な灯りが目に飛び込んできた。

先頭車両がピタリと目の前に止まり、立ち上がって近づくと左右に開いた扉から中に入ると、その車両は誰一人乗っていなかった。「おおつ。」

一車両を独占する事など生まれて始めてだ。小声で歓声を上げた後、隅っこの席に腰掛けた。

パツと顔を上げると、いつの間にか乗り込んでいた黒ずくめの男が向かいに座っている。いくらでも席があるのに何もこんな近くに座るとは…。

小窓から見える隣の車両にも誰もいないように見える。少なくとも

も今の駅では、二人しか居なかったはずだ。

「まさかなあ。」

この電車に俺とこいつしか乗ってないと思えるほど人の気配がない。ついでに言えば、別に恨みがあるわけでもないが、こいつには早々に降りて頂きたいものだ。

扉が閉まって、進行方向と反対側にかかる重力が心地よく体を押し始める。心なしかいつもより軽快に車輪が回っているように感じた。

窓から見える見事な満月。それだけで、この時間が永遠に続く事を願う。ガタンゴトンと電車に揺られる。いつもならこの揺れが眠気を運んでくるのだが、今日は少しいつもと違う景色や状況に興奮していた俺の臉は軽かった。

向かいに座った黒ずくめの男は深く被った帽子で表情は分からないが、眠っているように見えた。

「次は…。」

アナウンスが聞こえて次の駅が見えてきた。薄暗い灯りのホームには誰もいない。

「…ん？」

俺は、ここで始めて違和感を覚える。元々今日は違和感だらけの日であるが、それとは異質の雰囲気が車内に漂っていた。目の前の黒ずくめの男は相変わらず微動だにしない。

電車がホームに到着して扉が開く。ホームに漂う不気味な空気が車内に流込むと、温度が少し下がったのか、少し身震いした。無人のホームは薄暗い電灯のみが地面を照らしている。

それにしても駅員すら1人もいないのは妙だ。この路線には無人駅は存在しないはず。ましてや終電が過ぎる時間というわけでもないし…。

俺の疑問をよそに電車の扉は閉まって再び振動と少しの重力が体に押し掛かってくる。ウーンというエンジン音が耳に入ると窓の外景色が少しずつ流れ始めた。

それから何駅か通り過ぎる。途中の駅でも様子は何も変わらなかった。降りる駅は決めていなかったもののどの駅でもとても降りる気にはなれない。とは言っても環状線というわけではないので、いつかは降りる必要があるのだが、終電までに決めればいいし、終電まで時間もある。

流石に通勤と逆方向の景色は見慣れない事もあつて新鮮な風景だ。次々に新しい情報が頭の中に流れ込んでくる感覚は痛快なものがあつた。それだけでもこうしている甲斐があるのかもしれない。

さつきから何も変わらないのは、夜空にくつきりと浮かぶ月と、目の前で全く動かない黒ずくめの男だけである。こいつは一体どこで降りるつもりだろうか。もしかしたら、寝過ごしているのかもしれない。周りには誰もいないし、一度声をかけてみようか。いや、そこまで親切にしてやる義理もないか。

こうして迷っている間にも幾つかの景色と駅が流れていく。俺はいつの間にか瞼が次第に重くなっているのに気づいた。次第に思考が空白に近くなり考えが纏まらなくなってくる。やがて俺は、心地良い揺れの中で、少ない荷物を抱き抱えたまま意識を失った。

「うーん。」

どの位の時間が経っているのか分らないが、俺が目を開いた時には、眠る前と変わらぬ状態だった。月も男も相変わらずそこにあった。そして、またしても見知らぬ駅に停車する所だった。

「次は終点……。」

駅名が告げられる。確かにそこは俺の知っている路線の終点の駅名だった。車両を見回しても俺と黒ずくめの男以外には誰もいない。こんな事があるのだろうか、いくら何でも。

俺は今更置かれた状況の異常さに気づいた。

しかし、開いた電車の扉は今度は不気味に口を開けていつまでも閉じようとしなない。普通ならここで車内点検の駅員が何人か入って

きて、車内で寝過ごしている人や、棚に置かれた漫画、床に転がっているビールの缶などを片付けていく時間だ。

俺は何度か仕事の疲れで寝過ごしてこの終点の駅まで来た事があるから知っている。

いつまで待っても人の気配はない。ホームを照らしている電灯もいつものものより薄暗く感じる。仕方なく俺は電車を降りた。

背後に感じた気配に振り返ると黒ずくめの男が席を立っていた。

そいつは、俺と同じ出入口から電車を降りてホームのベンチに腰掛ける。

「あ、あの…」

俺は男の前まで言って思わず声を掛けた。現在の状況への焦燥感と、一応同じ時間を共有した事がそうさせたとは思えない。しかし、別に何の質問も思いつかずに軽く追い込まれた俺は思わずどうでもいい事を呟いてしまう。

「だ、誰もいませんね。」

「…」

沈黙が帰ってくる。まあ、そうか。俺も知らない人にそんな話を話しかけられてもそうするだろう。

「困ったな…」

時刻表を見ると引き返す電車は十分後に出るらしい。これを逃すと明日の始発までここに釘付けにされる事になる。俺は、迷った拳句、ホームのベンチに座って始発電車を待つことにした。もっと遠くまで行ける路線に乗り換え可能な駅まで行くしかない。この終点駅からは何処へも乗り換える事が出来ないからだ。

この男もここに座っているとところを見ると、俺と同じ様に寝過ごした口だろう。今度は寝るわけにはいかなかったのでとりあえず時間潰しに携帯電話を取り出した。

「ん？」

そこは圏外だった。立ってホーム内をウロウロしてみたが、電波が受信される気配はない。

「まったく、何て所だ。」

ホームから見える景色は、背の高い芒が何処までも広がっている。民家らしきものがポツリポツリと見えるが、灯りは灯っていない。まあ既に寝ていてもおかしくない時間ではある。

ホームに唯一あつた自動販売機でジュースを買う。ガタガタという音が周りの静かな空気に吸収されていった。

電光掲示板に示された出発時間が近づいてきていた。新たな電車が来る気配はないので恐らく、さっき乗っていた電車がそのまま引き返して走り出すのだろう。行き先の表示がいつの間にか変更されていた。

車内の灯りはずっとついたままだった。まあ、ここまで来たら考えても仕方ない。どうせ、俺とこいつしか乗っていないのを見て、車内清掃するまでもないと判断したから誰も出てこなかったんだろう。

しかし電車が走っていたという事は運転手がいた筈である。先頭車両に乗っていたのだから一旦降りるか反対側に移動する時に見かけそうなものであるが、少なくとも俺は見えていない。

「すいません。何か変だと思いませんか？」

俺は思わずまたしても黒ずくめの男に話しかけてしまう。男は、今度は顔を上げて一応俺の方を見たが、ただただだけで相変らず返答は帰ってこない。俺は乗り過ぐすと大変なのでとりあえず一礼して電車に乗り込んで席に座る。

それとほぼ同時に、まるで俺が乗り込むのを待っていたかの様に扉が閉じた。異様な気配で動き出す電車の中をゆっくりと先頭車両に向かって歩き出す。

最後尾から隣の車両に移るが、そこにはもちろん誰もいない。次々と車両を乗り移り前へ前へと進んだ。ここまで無人な電車は本当に初めて乗ったのかもしれない。

やがて行き着く先まで辿り着いた。最後の繋ぎ目を渡って先頭車両に入る。

「あ…。」

一番前の席に腰掛けた黒ずくめの男。こんな服装は二人といまい。
「あんたさっきの…」

思わず指差して話しかける。男は面倒くさそうに顔を上げてこちらを見たが、それ以上は何も言わない。どうやって乗ったんだ？

俺が乗り込んで扉が閉まった時にはまだホームにいたと思ったのだが、しかも先頭車両まで来る時間は絶対に無かった筈だ。

頭の中がグルグル回る。そんな時、不意にホームへの扉が開く。しかし、今の俺にはそんな事よりカーテンの向こうの運転席の方が気になる。黒ずくめの男の前を通り過ぎて運転席のカーテンのかかった窓に耳を付けると、カチカチと何かのスイッチもしくはハンドルを操作している音が聞こえる。

傍らに運転席に入る扉がある。ガチャガチャとノブを捻るが、鍵が掛かっているようだった。

「すいませ〜ん。」

不安に駆られた俺は窓をドンドンと叩いて呼びかけてみた。しかし、窓の向こうからは何の反応もない。運転中だからだろうか…。

仕方がないので次の駅に到着した後、再び同じ様に呼びかけてみるが、電車が駅に停車している間も何の反応もない。背筋に冷たいものが走り、ホームへ飛び出そうと、そちらを向くと丁度閉まったところだった。

やむを得ず黒ずくめの男の向かいに座る。そしてもう一度周りを見回した。いつもの雑誌の広告がぶら下がった車内には異世界的な雰囲気はない。ただ、そこに流れる空気は冷房もついてないにも関わらず肌を刺す。

目の前の黒ずくめの男に対して少しずつ怒りすら覚えてきた。が、いくら睨み付けても帽子の奥の目は呆然と床を眺めているだけだ。

「…あんた、何か知ってるのか？」

俺には人に話し掛ける事自体が勇気がある事だが、この時ばかりはそうも言ってられず、何の躊躇いもなく男に話し掛けた。

「……」

「さつきから何なんだよ。俺はどうしちゃったんだ？」

生まれてこの方あまり感情を表に出した事はない俺がいつしか黒ずくめの男に詰め寄る姿は我ながら似合わないと思う。

「……」

何か言えよ。ん？、待てよ、話せないのか？

それならばとポケットから手帳とペンを出して質問を書きながら、そいつの目の前に翳した。

「ここは何処なんだ？」

あまり綺麗な字ではないかも知れないが、言葉が分かれば普通に読める筈だ。しかし、そいつは興味なさそうに視線を下にそらす。字も読めないのであれば、完全にお手上げた。もしかしたら俺は全く違う異世界に迷い込んでしまったのだろうか？

「くそっ！」

俺は歯を食い縛りながら男の向かいに腰を下ろす。絶対に次の駅で降りてやる。

流れていく景色に俺は奇妙な事に気がついてしまった。

「月が……」

あれだけ煌々と空にのさばっていた満月が何処にも見当たらない。背後の窓も振り返って覗いてみたが、星1つ見当たらない。始めは曇っているのかと思ったが、目を凝らしてもそうは見えない。

更に悪いことに気づく。やたら駅間が長くないか？、時計を見たが、いつの間にか見事に壊れていて、既に時間を刻んでいなかった。やけに電車のスピードも速い気がするし、外の風景にも生気が感じられない。

「……」

突然に眠気に襲われた。さつきまでの興奮の反動だろうか。目的の駅まではまだ数駅あったので、大丈夫だろうと、重い瞼に逆らわずにそのまま眠ってしまった。

意識は起きたが目は開かずにいる。数秒ばかり眠る前の状況を思い出そうとする。ふと肩が誰かに触れて目を見開いた。太陽の明るい光が不意打ちで目を突く。

「え？」

キョロキョロと周りを見回す俺に、左右の席に座っている人や目の前に吊革を持って立っている人達が不審者を見る目を向けている。普段の俺なら縮こまってしまふのだが、眠る前の状況を思い出した今となっては逆に周りに同じ目を返す。

「…夢落ち…？」

誰にも聴こえない位のボリュームで呟いてみたが、手に持ったりユックの中に終点駅で昨日買ったジュースのペットボトルがあるのを見て夢ではないと判断した。

周りを見るとどうやら何時もの通勤電車の風景だった。寿司詰め
の車内は閑散とした無人電車とは対称的に熱気に包まれていた。

どちらを見ても人、人、人。それが嫌で逃げ出した俺には地獄絵図に見える。降りようにも人を掻き分けて降りるには少し勇気が必要だったが、とにかくここから出なければと席を立てて扉に向かった。

「ぶはっ…」

海底から陸に上がった様な深い深呼吸。見慣れた景色は職場の駅だとすぐに俺に気づかせた。俺と同時に降りた何人も人が狭いホームにひしめき合い、階段とエスカレータに並んでいる。朝の一番混みやすい時間だ。この人の流れに乗ってしまったら、せつかく逃げ出した空間に戻されてしまう。

根拠は無かったがそう思ってしまったので隅っこのベンチに腰かけて、詰まっている行列の方をボーッと見ていた。

突然に雷に打たれた様な衝撃が体を貫いて硬直する。

「あれは…」

見慣れた後ろ姿だ。見慣れたもなにもスーッと姿のその男は人混み

に紛れながらも軽快に階段を上がっている。その肩幅、髪型、スーツの色、少しよれた鞆、どれをとっても、俺自身が良く知っているものだった。

世の中にはよく似た人が三人はいると言うが、まさか…。悪い予感に捕らわれながらも、俺は自然とベンチを立ち上がって人混みに紛れ込んだ。

その背中を一定の距離で追いかけている間、頭の中は真っ白になっていた。何故追いかけたのか、その根拠すら曖昧なまま足は前へと進む。

駅の改札をくぐるそいつを追いかける。どう考えても見慣れた通勤路を通って会社に向かっている。しかし、それまでの道のりの風景は、微妙だが何かが違っている。

ビルの合間をぬって進んでいくと、見慣れたビルが見えてきた。どう見ても俺の会社だ。前を歩く追跡対象は俺には一度も気づかずに早足でビルに入ってしまった。

このビルは少し妙な造りになっていて1階入口からエレベータまで長い1本道の廊下になっている。あまり大きなビルではない為に受付などというものは無い。俺はビルの入口からそいつがエレベータに入る所までをはっきりと目撃。エレベータの扉が閉まる直前男が振り向いた。

「……！」

その顔は初めて見るものではない。毎朝、顔を洗う時の鏡等で見る自分の顔だった。少し雰囲気は違ったが、いくら物忘れが酷い俺でも自分の顔を見忘れる事はないだろう。

「何なんだ？」

思わず一人で呟くが、それについて解説を加えられるわけはなく、いくら考えても分らない。その場に十分程立ち尽くした後で俺はとりあえず近くの公園に移動した。

公園では、中央の噴水の周りで集まってきた鳩に餌を与えている老人や、乳母車を押している母親など、良くある景色が広がっている。昼休み時には、近くのオフィスから色々な人が押し寄せて憩いの場として活用されている公園である。

しかし、あんな体験をしまった俺には、ここが夢の世界に思えてならない。ふと目を覚ますと、あの電車の中でリュックを抱えて座っているのではなからうか。そんな期待だけに支えられているような状態だ。

「これからどうしようか……」

少し腹が鳴る。そう言えば、朝飯も食べていない。とりあえず、この腹を何とかしないと思考回路もろくに回らない。ふと、立ち上がると、公園の入口から数人のスーツ姿の人々が公園内に入ってきた。自分の時計は壊れていたので公園の時計を見る。しかし、「修理中」と書いた張り紙が目に入った。

入ってきた人達がお弁当を広げるのを見るとどうやら昼時らしい、幸いこのオフィス街に親しい友達などはいなかったので、私服姿を見られたとて、さほど害はないのだが、問題は、自分の行動パターンからすれば、コンビニ弁当を持って公園で食べるのが日課になっているという事だ。しかも、いつもの癖でいつものベンチには、今まさに自分が腰掛けている。

別に悪い事をしていないわけではないのに、俺は自然とベンチを離れて近くの木の影に移動した。天気は良く、土の地面にクツキリと映る木の影の中はとても涼しい。いつも通りのどかな公園の中では、俺だけが異物である様な空気感を出しているのが自分で分かる。

「む……」

やがて少しすると予想通りに「俺」が公園に入ってきた。抱えたコンビニの袋は良く行く店のものだ。恐らく中身は、日替わり幕の内あたりだろう。何をこそそしていたのか自分でも分らないが、俺は本能的に身を隠した。ベンチから見て後ろ側に周り半身を出してこっそりと「俺」を観察する。「俺」は、俺の予想通りにいつも

のベンチの右端に座ってコンビ二の袋を開いた。こちらからは背中しか見ないので、弁当の種類までは分らないが、確実にそもそも食事をしている。

「さてと、どうするか…」

見つからなかった安心感からその場に座り込んだ。だが視線は、「俺」から外してはいない。これからの事を思案していると、ふとベンチの反対側、つまり左端に座っているそいつに気づいた。

いつからいたのだろうか、弁当を持った「俺」が右端に座った時には、確かにいなかった筈だ。しかし、今は、シーソーのバランスを取るように、ベンチの中央から全く同じ距離の反対側に座っているその人物にも見覚えがある。

「あいつ…。」

帽子から背中まで、たった一色しかないその服装は、電車の向かいの席に座っていたあの男以外の何者でもない。何であいつがこんな所にいるのだ。

少しパニックになった頭を整頓している間に、「俺」とその黒ずくめの男が何か会話しているのが見えた。「俺」は男の方を向いて何かを喋っている。この距離では、声は何も聞こえない。自分と同じ顔を見るだけでも気持ち悪いのに、俺には近づいて何を言っているのかを確かめる事などできなかった。

「俺」は結構な剣幕で何かを男に言っている。俺は電車の中での自分と男のやり取りを思い出した。

「あいつ、結局何も言わなかったな。」

恐らく今も俺の言葉に対する返答は何一つ返ってきていないのだろう。暫くはそんなやり取りが続くと「俺」はベンチを立てて公園を立ち去ってしまった。

それを確認すると、俺はベンチへと近づいて男の正面に回り込む。やはり、あの電車の男だ。

「お前は、何者なんだ？」

「…」

男の沈黙には慣れてきた。目立つのは嫌だったので、俺は大きく深呼吸をして心拍数を下げる。そして、ベンチの「俺」が座っていた所に腰掛けた。

「ここは…、何処なんだ？、こいつは夢じゃないのか？」

まるで人形に向かつて話している様に虚しいが、この男が何か知っている事は間違いない以上、こいつから真相を聞くしかない。

「何で俺に付きまとうんだ？」

質問ばかりで会話のバランスが悪い。俺は、喋るのをやめて考えた。夢であれば、時間が経てば目が覚めるだろう。

「もういいよ。」

俺は男から聞き出す事を諦めてベンチを立ち上がる。しかし、横をふと見ると、男は既にそこにはいなかった。こういう不思議な事でも慣れはあるものだ。あいつが只者でない事は間違いない。そしてこの世界は、俺がいた世界ではない。確信はないが、これまでの状況から見て間違いないと思う。問題は、ここから帰る方法だ。

「帰る？…」

俺は空を見上げて少し笑った。帰る…か。

ほんの昨日まで現実の世界からどれだけ遠く離れるかを考えていた俺が、今度は元に戻る方法を考え始めている。今、まさに最初の願い通り、遠くへ来た筈なのに…。だいたい元の世界に戻ったとして何があるというのだ。

俺は、リュックに入っていたペットボトルを取り出して一気に飲み干した。温い炭酸が刺激する喉は、この世界がリアルに存在している事を俺に教えているようだった。

「げほっ…。」

乾いた喉に慌てて流し込んだので少し蒸せてしまった。

「ふう…。」

口を拭って顔を上げる。とりあえず、もう1人俺がいるという事は、ここは本来俺がいる場所ではないという事だ。傷心旅行的な軽いサボリだった筈なのに、とんでもない事になった。

「さて、これからどうしようか。」

思案しながら公園を出ると、不意に目の前に人だかりが見えた。数十人の人達がビルの前で何かに群がっている。

「？」

それどころではないと通り過ぎようとしたが、ふと、そのビルが自分の会社のビルだと気がついて足を止めた。

「何だ？」

「自殺か？」

人々が口々に唱えているのを聞いて、脳内に電撃的に悪い予感が広がる。

「ち、ちよつと、すみません。」

人混みを掻き分けて群集の中に入る。しかし、狭い道に予想以上に集まっている為に中々体が前に進まない。少しずつ体を前のめりにしていくと、人の隙間から倒れている「俺」の顔が見えた。俺は目を見開いて、人混みを掻き分けていた腕の力が抜ける。

「どけよ！」

突然何ものかに突き飛ばされて、群集からはみ出す。

人混みから何とか抜け出すと通りの向かいに黒ずくめの男が立っているのが見えた。俺はこの時に何度も見たその姿で背筋が寒くなる。男は無表情のままだったが、俺には笑っている様に見える。

ツカツカと詰め寄って男の表情を覗き込んだ。

「説明してくれ。って言っても無理か。」

一人完結した俺はそのまま男から離れた。背後からは救急車のサイレンが聞こえる。

電車に揺られていつもなら座ったら眠気に襲われる筈だが、この時ばかりは興奮で目を開いたままだった。特に何をというわけではないが、電車から見える景色を睨み付けている。この時の俺の顔は恐らく笑う子も泣く顔をしていたのだろう。

「次は」

アナウンスが流れて席を立つ。周りの数少ない着席している客はほぼ全員が居眠りしていた。

ホームに降りるとまず周りの様子を見回す。駅員が笛をふいているいつもの駅のホームだった。それでも警戒を解かずに改札へと向かう。

正直電車に乗っている間、気が気ではなかった。普段なら仕事をしている昼間の時間帯とはいえ、今の俺の身の回りでは何が起こるか分からない。

家路を辿る途中で時々振り返る。あの黒ずくめの男が、何処からか俺を見ている様な気がしてならない。駅から家までの街並みも微妙に何かが違っている。

しかし今の俺にはそんなことはどうでもいいことだ。ここが既に別の世界だということは間違いはなさそうだ。今の俺に必要なのは元の世界に戻る手段を探すことだけだ。その手掛かりになるかならないかも分からないまま、さっき死んだ「俺」の家に向かっている。微妙には違っているても大まかな場所は何も変わっていないかったのだ、あつさりと家に辿り着く事ができた。正確には自分の家ではないのだが。アパートの階段を登る途中に見慣れたおばさんとすれ違う。

「あれ？もう会社終わったのかい。」

「いや、気分悪くて早退したんで…」

「そりゃお大事に。」

普段は声など掛けられないはずなのだが、こちらの俺は少し社交的なようだ。

ドアの前に立ち鍵穴に荷物から取り出した鍵を差す。駄目元でとった行動だが、ガチャリと音がして、あつさりとドアは開いた。

中に入ると、家具の配置や匂いも微妙に違っていた。こつちの俺は少し整理整頓が出来るようだ。

物の配置が変わっても俺本人であれば癖や考え方に大差はない

はずだ。俺は机に座ってそこにあつたパソコンのスイッチを入れる。パスワードでロックされた画面が表示されると、何の躊躇いもなしに自分の使っていたパスワードを打ち込んだ。

いつもの当然の流れの様にホーム画面に切り替わる。さっき死んだ男が「もう一人の自分」であるという確信がますます募っていた。更にデータを探してみる。さすがに一言一句同じデータというわけにはいかないが、幾つかのテキストファイルを開いてみると不気味なメッセージじみた文字が踊っていた。

職場や自分の周りに対する不平不満、まあ全部読まなくとも書いている内容は予想がつく。

暫くデータをザッピングしていると「あれ？」と思う様な不可解な日記が目に入ってきた。当然俺自身はこんなことを書いた覚えはない。

「今日もアイツが後ろからついてくる。死神の様な黒ずくめの男だ。いや、実際に奴は死神なんだろう。朝に駅の前にいたかと思えば、電車に乗ってもいないのに会社の最寄り駅に俺が降りた時には出口に立っている。」

背中が少しひやつとした。思いきり身に覚えのある体験だ。どうやらアイツは「俺」につきまとっていたらしい。それから暫くは黒ずくめの男への恐怖と苛立ちが綴られている。同じ事をやられたら同じ様に書いていただろう。

日記も最後の方に差し掛かると、「常に何かに追いかけられる夢を見る」や「何処からか落下し続ける夢を見る」など、かなり追い詰められた表現が増えてきた。そして最後のページを開く。

「何もかもうまくいかない。遠くへ行きたい。」

同じだ。俺は今遠くに来ているはずなのに、現実に戻された様に不快感が漂う。同じ遠くでも、それを死と解釈した事はない。日付を見ると、どうやら今朝書いたものらしかった。

ファイルを閉じて窓の外を見ると、夕焼け空が赤々と燃えている。「俺はどうすりゃいいんだ。」

無論何処からも返答はなく、静まり帰った部屋の中で侘しくなる一方だった。振り替えれば、あの無感情な目がこちらを見ていると思うと、後ろを向くのも勇気がいる。

ここにも何も始まらないとばかりに早足に外に出た。

周りを見渡すが、誰もいない。人通りが少ない時間帯とはいえ少し様子がおかしい。あの男は何処から俺を見ているのだろう。俺の足は自然に駅の方に向かって歩き始める。

1分毎に暗くなる街並み、長い様で短い駅までの距離を歩き切る。居酒屋などの看板には灯りが灯っているにも関わらず人の気配がないという異常な事態に俺は戸惑うばかりだった。

駅に入るとますます異世界への扉を開いた感があった。そこは無人で、あの黒ずくめの男すらいない。今俺は世界のどの位置にも立っていないのだろうと思える程に孤独感が襲い掛かる。

既に外は日が沈んでいた。駅のホームは改札からは見えない位置にあるが電車が走っている音は聞こえる。まるで誰も乗っていない様な軽快な車輪の軋む音が。

「はっ……」

背筋に寒さを覚えて俺は振り返る。そこは、黒い影が立っている。

「またか。俺に何の用だ？」

「……」

黒ずくめの男は相変わらず沈黙を守っていた。この先に会話が始まるなどとは夢にも思っていないが、口に出さずにはいられない感情が俺の中で渦巻いている。

「俺は……死にたくはない。」

そう呟くと同時に男は振り返って夜の暗闇に溶けていった。遠ざかる背中、寂しそうにも見えたとし、泰然としていた様にも見えたと。まるで絵画の一部の様に、夜を描いたキャンバスに黒い絵の具を一滴垂らしたような男の姿を完全に見えなくなるまで俺は呆然と眺め

ていた。

振り返って階段を上がる。そこにある僅かな光が導くように俺はホームへと向かった。まるで俺を待っていたかの様に、丁度電車がそこに止っている。俺は少し迷いながら、ホームにあった自動販売機で炭酸のジュースを一本買って電車に乗り込んだ。

そこには勿論誰もいない。発車のベルが鳴ると、走り出した電車の振動で少しバランスを崩した。ヨロヨロと先頭車両まで歩いて一番前の席に腰を降ろした。空には星も月を見えない。しかし、電車の揺れは否応なしに俺の瞼を重くする。

「帰ったら…今まで通りで、いいか…」

自分でも何故帰れると思ったのかまるで分らない。何の根拠もない安心感で更に瞼が重さを増す。俺の呟きは誰にも聞こえないはずだ。次に目覚めた時には窓から月が見えている事を期待して俺は静かに目を閉じた。

山

「おい、起きろ。出発する時間だ。」

あまりに返事がないので私はテントを捲って覗き込んだ。仲間は寝袋の中で目を閉じてじっとしている。動きがないのでとりあえずテントに入り頬を叩いてみた。普通なら飛び起きて顔が紅潮するはずだが、人形の様に生氣はなく閉じた目が開くこともなかった。

「おい、どうした？」

他の仲間が背後でテントを捲って覗き込む。

「駄目だ…。」

「え？」

私の言葉が耳に届くと、仲間は驚きの表情をする。それがテントの外で待っている他の仲間が届くと一同動揺し始めた。私は物言わぬ屍となった仲間を一旦降ろすとテントを出る。

「駄目って…まさか…。」

私の目の前には3人の仲間が、真剣な表情で暗い顔をしている私を覗き込んだ。皆言葉にしくなくても最悪の事態を予想している。そして、それは的中していた。

「駄目だ。もう息をしていない。」

「心臓マッサージは？、昨日はあんなに元気だったんだぜ。」

「そうだ。食欲のない俺の分の携帯食料まで食ってる程だったのに。」

皆口々に私に蘇生を薦める。

「駄目だ。硬直具合からいっても、もう息が止って数時間は経っている。蘇生は難しいだろうな。」

私の言葉に皆、まだ何か言いたそうだった口を閉ざす。他に出来る事はないかと頭を回転させるが、我々に出来る事は何もありそうにない。遺体を担いで行くわけにも行かず、さりとて手厚く葬る時間や道具もない。

「どうするんだ？」

その言葉は誰の頭にも浮かんでいる。

「引き返そう。ここらが限界だ。」

私ではない誰かがそういう。多数決では間違いなくその意見が採用されるはずだ。しかし、私は一同を見回した後、静かに口を開いた。

「いや、このまま進む。」

「は？」

全員が横一列に同じリアクションを取った。

「正気か。確かに食料や道具の問題はない。しかし、この天候でもう10時間も足止めを食ってるんだ。様子を見て風が落ち着いたら、下山すべきだ。」

彼の方がまともな意見なのは十分に承知している。しかし、私には必ず頂上に行かなければならない理由があった。

「降りたい者はそうしてくれ。私に付き合う必要はない。」

私の中でも苦渋の決断だった。本当は続行する事を説得しなければいけないのだが、死者まで出してしまった以上、私に強く引き止める権利などあるはずがなかった。

「おいおい、待ってくれ。何であんたそんなに無理するんだ？、一旦引き返してまた昇ればいいだろう？、今回は運がなかったんだ。」

山の天気は変わりやすいなどと俗に言うが、今回のそれは登山経験豊富なメンバーをかなり戸惑わせた。1日置きに正反対の天候となるだけでなく、常に吹き続ける強風が我々の気力と体力を削り続けた。そして遂に、犠牲者が出ってしまった。残っている者達も既に限界を感じているのは仕方のない事だ。

「…運か…。」

俯いてにやけている私をメンバーは蔑んだ目で見下ろすと、そのうちの1人が不意に立ち上がる。

「分ったよ。俺は降りさせてもらう。死にたくはないからな。」

もう1人のメンバーで一番若い者が続いて立ち上がる。

「僕も…悪いけど…」

2人は自分のザックを背負うと風が止むのを待つ為にその場に座り込んだ。今朝も強風が吹き荒れていたが、一時程ではないし、霧のような朝靄も風に飛ばされて晴れかけていた。

最後の1人が私の横に座りなおして肩に手を置く。

「どうしても、今回じゃないと駄目なのかい？」

「ここまで来て戻ることはいできない。次はいつになるか分らないからね。」

私の力強い答えに最後の1人が諦めた様に溜息をつく。

「君が頑固なのは知っているが、今回は少し譲ったらどうだい？」

嗜める様に静かな声は風に乗って私の耳には半分ほどしか届かなかったが、それでも十二分に意図は伝わった。

「残念ですが。」

「そうか。」

最後の1人が、他の2人と同じ様にザックを背負うと、その途端朝靄が晴れて風が弱まった。他の2人も立ち上がると私を振り返る。「これが最後のチャンスだぞ。君が頂上に辿り着けないとは言わない。しかし、復路の事を考えると生きて帰ることは難しいかもしれない。生存確率を考えれば死に行くようなものだ。それでも行くのか？」

私は静かに首を縦に振る。

「分ったよ。もう何も言わない。好きにするといい。」

「それじゃ。」

「幸運を。」

3人のメンバーはそれぞれ軽く手を上げて、そのまま山の斜面を下り始めた。晴れてみると見晴らしのよい場所で3人の背中が小さくなっていく。

「さてと…。」

私は遺体の寝袋をその場に放置してザックを背負う。出発前にほんのささやかな黙祷を捧げて、3人とは正反対の方向へ重力に逆ら

つて歩き始めた。

「ん？」

ふと前を見ると山肌に晒された幾つかの岩のうちの1つに誰かが座っている。そんな馬鹿な、前人未到のこの山に我々以外にも誰かが？、いや、その存在よりも私の目を引いたのは男の格好だった。三角の帽子を深く被り、分厚いコートのようなものを着込んでいる。少しサイズの大きなブルブルの長ズボンに紐で縛るタイプの靴。おおよそ登山をするような格好ではない。

この格好でここまで昇ってきたのだとしたら、それだけで我々のこれまでの苦勞を見下されているような不快な気分になる。

「……」

私は一旦立ち止まって目の錯覚ではないかと、もう一度目を細めてその男を見直した。しかし、そいつは間違いなくそこに存在している。気持ちいを落ち着かせる為に、腰にぶら下げたステンレスの魔法瓶を持って水分を補給する。しかし、それでもそいつの存在は消えなかった。

男は目線の位置が分らない程に帽子を深く被っていたので私を視認しているのかどうかは分らない。しかし、間違いなく私の存在には気づいているはずだ。礼儀の面からもこのまま無視して通り過ぎるわけにはいかないだろう。私は遠くから一礼して男に近づく。

男は座ったまま全く動かずにこちらを見ているのかどうかも分らない。いや、もしかして死んでいるのかもしれない。確かに近づけば近づく程、男から生気が感じられない事が不気味に思えてくる。

「こんにちは。」

勇気を出して声をかけると男が顔を上げた。よかった、どうやらとりあえず生きてはいるようだ。

「あの……いつからここに？」

男は何も答えない。

何なんだ…私が時々立ち止まって振り返るが、男はそれを気にする様子もなく一定の距離を置いてついてくる。別に何かをするわけでもないの、来るとも言えず、私は背中に不気味さを背負ったまま頂上へ向けて歩いていった。

しかし、何者なのだろう。見たところ登山の装備どころか、水筒一つもっていない。途中でなくしたとも考えにくいし…仲間割れでもして荷物を取られたのだろうか…。息一つ切らさずついてくる様子なので体力には自信があるのだろう。助けてあげたいが私の方も余裕がないし、第一意思疎通自体が困難な状況では、何もできない。「あの…。」

私は思い切ってセカンドコンタクトを試みた。

「何処までついてくるつもりか知りませんが、一刻も早く山を降りた方がいいですよ。」

私の最大限の親切心だ。男に反応がないので、やむを得ず前に向き直り再び歩き始めた。

既にかなり空気が希薄になっており、息切れの間隔が刻一刻と縮まっている。休憩を何度も小刻みに入れながら、頂上との距離を確実に詰めていく。

天気は快晴。上を見上げると青いキャンバスに吸い込まれそうな程雲一つない空だ。太陽の日差しが冷えた空気と汗で下がった体温を補完する様に照り付けている。今の瞬間は、この登山の中で最も恵まれて充実した時間だった。あそこで帰っていれば味わえなかったところだ。

周りには人工物は見当たらない。それも、前人未踏である事の何よりの証だ。月にすら到達した人類も、この山のこの場所にはまた足を踏み入れていない。宇宙飛行士もこんな気分で月の地面に足を踏み出したのだろうか。今の私の一步は普通に街中を徒歩する一步とは重みが違う。

真上に見える太陽が午後の始まりを続けている。山では午後から

の方が天気が崩れ易い。ここから何処まで進んで休憩を取るかというタイミングが何よりも大事になってくる。背後について来ている黒尽くめの男も私と同じタイミングで休憩をとっているから体力的な事を心配する必要はないだろう。

というか、何故私が突然現れて勝手にについてくる見ず知らずの人の心配をする事があるのだろうか。妙な事になったものである。

頂上に近づくにつれサングラス越しに見える山々の景色が私の不快な心を洗い流す。

頂上へ行くまでは少なくともあと1泊は必要だろう。無理をすれば登頂は可能だが、天気が崩れた場合に山頂近くで1泊するのは危険が大きい。半日ほどで頂上とベースを往復できる程度の距離で休憩する方がよい。しかし、地図には前人未到の頂上までの距離などが書かれているはずもなく。私は経験則で、最後のベースキャンプの場所を決めた。

例の男は私がテントを広げている間に近くの岩に座って私の様子をじっと見ている。気にするなという方が難しい。どう見ても、テントなど持っていないだろう。が、私のテントは1つしかないので貸すわけにもいかない。どうするつもりなのだろうと、時々男の方を見てみたが、特に何かをする様子もない。

男は岩肌に腰を降ろすとそのまま、また動かなくなった。

少しだけ風が強くなったように感じる。私には天候が変化する前触れなのだと直ぐに分った。

やむを得ず私は、黒尽くめの男に近づく。

「これから、天候が変わって強風になります。下手すればホワイトアウトになるかもしれない。私のテントが少し広いので、そこへ来ませんか。」

今までの男の態度から、もしかしたら言葉が分らないのではと心配もしたが、男はゆっくりと立ち上がった。どうやら私の声は届いているらしい。

「どうぞ。」

私達はテントに入る。

「本当はお茶でも出したいところですが、生憎切らしてましてね。」
「……」

男は沈黙で答えた。まあ、返答を期待したわけではないので良しとする。

バタバタとテントの幕が激しく揺れ始めた。予想通り風が吹き始めたようだ。私の予想では、このまま吹雪になるだろう。元々低かった気温が更に下がっているからだ。

「それにしても、よくその服装でいれますね。」

男の格好はおおよそこの気温に耐えられるものではない。顔色一つ変えないのは、我慢強いのか気温を感じる器官が麻痺しているのか分らないが、見ているだけで身震いしてしまう。

「……」

男の表情からは喜怒哀楽の感情が全く読めない。

「本当はね。私も今朝まではパーティで登っていたんですよ。」

別に沈黙に耐えられないわけではないが、私も丁度話相手が欲しかった所だったので1人で話始めた。テントを叩く風からすればどの道暫く動けそうにないからだ。

「そのうちの1人が死んでしまつてね。他の仲間は引き返す様に私に言っていたんですが、私1人がどうしても譲れなくて、こうしているわけですよ。」

「……」

「どうして私がそう頂上に拘っているのか？」

「……」

男からすれば、私の過去などどうでもよいのかも知れないが、私は構わず話を続けることにした。明日には、もう話すら出来なくなっているのかも知れないという危機感が私の口を動かした。

「十年前に私には友人が1人いたんです。そいつとは、学生時代から一緒にいろんな山に登った。いくつもいくつも。私なんかより体力も技術もよっぽど優れていた。私は悔しくて努力しましたが、ど

うしても追いつけなかった。この山の調査隊が公募された時には、勿論私達2人は応募しましたが、当然の如く選ばれたのはそいつだった。」

私は記憶を引きずりだしながら一言一言言葉を紡ぎだす。最早男の反応などどうでもよくなっていた。

「何、本当か？、修二。」

俺は椅子から立ち上がり机を強く叩く。

「ああ、通知が来たんだ。だが1つ問題があるんだ。」

「問題？」

「出発は半年後なんだが…。」

「それがどうした。」

口籠る修二の肩を掴んで顔を近づける。

「いや、その、予定日がその頃なんだ。」

「そうか。奥さん元気なのか？」

「母子共に健康だよ。でもなあ…。」

一度山に入ればどの位の期間で戻ってこれるのかは分らない。最長の日数は大体決まっているが、前人未到の場所ともなれば、何が起こるか分らない。リーダーの判断により直ぐに帰ってくる場合もあるが、最悪の場合は数ヶ月程戻ってはこれない。

「一次調査隊の報告は俺も読んだが、最悪で3ヶ月程だろうな。」

「うん。俺もそう思う。上手くいって登頂して戻ってくるとしてもそれぐらいだな。」

「最悪の場合は…。」

「おい、弱気になって馬鹿な事いうんじゃない。」

「冗談だよ。分った分った。」

修二は席を立てて廊下へと出た。

「何処へいくんだ？」

「決まった以上、準備しなくちゃな。来週の予行演習に参加するんだよ。」

「そうか。俺も行くぜ。」

俺は修二の後について行った。技術面でも体力面でもこいつに勝てた事は一度もない。悔しいが、今回選ばれたのは当然の選定だと思う。今度の本番は世界級の山だけあって、予行演習といってもかなり過酷なものだった。俺にとっては本番さながらの予行に付き合わされた事によって自分のレベルアップにはなったのだが…。

それからの半年の体力造りは完璧だった。別に俺は登るわけでもないのだが自分でもこのままこいつについていけるんじゃないかと思う位自分の体力も充実していた。

「それじゃ、気をつけて。」

「ああ。」

奴は奥さんから白いハンカチを受け取ると俺の方を向いて拳を突き出してくる。

「ちよつとそれ貸せ。」

俺は奴からハンカチを奪い取るとポケットからペンを取り出して一言書き添えて返す。

「それじゃお先に。」

「ふん。直ぐに追いついてやる。」

強がりを言いながら奴の拳に自分の拳をあわせる。お腹の膨れた奥さんと俺に見送られて奴はゲートを潜った。

それから3ヶ月経ったある日…

「おい。お前に面会が来てるぞ。」

「え?」

図書室で調べ者をしていた俺の肩に突然、友人が手を置く。

「面会?」

「ああ、何か子供連れの女だけど、お前まさか…。」

「馬鹿野郎。」

「まあ、冗談だよ。西口の受付にいるみたいだぜ。」

軽口を叩いて図書室を出ると西口へ向かう。その女性は子供を抱いてソファーに座っていた。俺の顔を見ると立ち上がった一礼する。「ああ、生まれたんですね。すみません。あいつによろしく言われていたのに、忙しくて。」

「いえ、それよりこれを。」

奥さんは一枚の紙を俺に手渡した。

「あいつ元気ですかね。」

俺は貰った紙を開きながら軽く聞いてみた。しかし、その紙に書かれた内容を見て口を閉ざす。

「…これは…」

「昨日、その手紙が届いて…。どうしたらいいのかわらなくて…。よく見ると彼女の目が真っ赤に腫れている。タベ泣き明かしたのだろう。」

「そんな。全滅って。」

山岳隊と連絡が取れなくなる事はよくある事だ。天候や磁場の状態や無線が故障している場合もあり、我慢強く連絡を待つというのも常識の1つだ。しかし、2週間連絡が途絶えることは絶望的な事だった。予定通りなら既に登頂して下山を始めている筈だったが、誰一人戻っておらず、全滅の可能性が濃いという一連の説明が無機質に紙に書き並べられていた。

「くっ！」

俺は紙を床に叩きつけると壁に拳をぶつけた。

「あ、あの…」

「あ、ああ…すいません、取り乱してしまつて。とにかく共通の知人に連絡して確認してみます。心配でしょうが、3日程待つてもらえますか。何かあったら私の方から連絡しますのです。」

「は、はい。宜しく願います。」

奥さんは一礼して出口へ向かう。途中見えなくなるまで何度も振り向いては頭を下げた。この状態で3日も待てとは辛いとは思うが、俺のつてを使っても確かな情報を得るまでにはそれくらいは最低で

もかかるだろう。一番いいのは俺自身が現地へ向かう事かも知れないが俺にも仕事を空けるわけにはいかない。

その日は電話で現地とつながりのある友人に確認する様に手配するので精一杯だった。

数日後、俺の元に来た知らせは絶望的なものだった。搜索隊が組織されて入山する事が決定した様だが、その目的は生存の確認というより、死亡の確認に近い意味合いなのだろう。元々組織された登山隊前二十名、誰一人戻って来ていない。登頂していてもしていかなくても既に予定下山期間を終えている上に全く連絡が取れないのであれば死亡の判断も妥当な事だろう。

俺は奥さんに連絡を入れると、搜索隊に入れる様にコネをフル活用して手配する。しかし、それも何も実らなかった。

「その時の搜索隊は何一つ見つける事が出来ずに成果はゼロ。山へのアタックも暫くは先送りになった。今回の登山までの十年、この山に誰も近づいたものはいない。」

私は長い昔話を終えて顔を上げる。黒ずくめの男は先程と何も変わらない体制で座ってじっとこちらを見ている。

「退屈だったかい？」

「…いや。」

男が沈黙を破った事は驚くべき事だったが、私は特にそれに触れずに話を続ける。

「あいつが…修二がこの山の頂に立ったのかどうか、確かめたい。もし、それが確認できればそれを世間に発表してあいつは歴史に残る。そしてもし、あいつが辿り着いていなければ、私が初登頂を果たして、奴を追いついた事になる。」

「そうか…。」

男は納得したのかしていないのか男は一言言い放った。

テントを打つ風が少し収まってきたのか、さっきまでバタバタと音を立てていた壁のざわつきが収まっていく。

出口から外を覗くと雲が晴れていた。しかし既に日没間近の時間帯だったので、私はこのままここで休むことにした。

「今日はこのまま休んで夜明けとともに出発する。それでいいな？」

男は私の言葉を聞いているのかいないのか既に目を閉じていた。よく考えれば私が気を使う必要はないのだ。私は考えるのを止めて目を閉じた。

目を開くと既に薄っすらとした日光がテントの幕から漏れ出している。何処か遠くから小鳥の泣き声が聞こえてきそうな程、安定した温度だ。テントの中には私しかない。あの男は何処に行ったのだろうか。

私の話を聞いて諦めて下山したのだろうか。

テントの出口を捲って外に出る。すっかり雪は溶けて、昨日の視界が嘘の様に晴れ渡っている。薄い空気が肌寒さを訴えていたが、私はそれより、目の前に見えた風景に神経が集中した。

「ま、まさか……」

もう少し距離があると思っていたのだが、まさか、こんな近くにあるとは……

歩いていけば百メートル程だろうか。澄み渡った空をバックに間違いなくその頂は存在した。いや、頂そのものがある事は分っていたが……

「あいつ……」

頂に立っている旗は間違いなくその地が前人未到ではない事を物語っていた。私は歩いて旗に近づいていく。その旗には何の模様もない。そしてそれはかつて修二が出発する時に持っていたハンカチだ。旗、いや、ハンカチの隅にサインされている修二の文字は間違

いなく奴の筆跡そのものだ。

「そうか。やっぱり私は彼には追いつけなかったのか…。」

空を見上げて大きく深呼吸をする。たとえ初ではなくとも一番高い所というのは気分がいいものだ。

私は周辺の山々を見下ろす。ついでにあの黒ずくめの男も探したが周辺には誰もいない。

「ふふふ、こんなに近いんだ。私が2番目ではなくて3番目になつてしまったかもしれないな。」

本人がいないのでは既にそれを確かめる術はない。しかし、今の私には2番目だろうが3番目だろうが、そんな事はどうでもいい事だ。

「ん？」

ふと下を見ると地面を掘り返した後を見つけた。私はしゃがんでその土を少し掘ってみた。土質が硬く中々てこずる。地質調査の為に誰かが掘り返したのだろうと思ったが、指に何かが当たった。

「何だ？」

石ではない。掘り返してみると何かカプセルのようなものだった。修二か誰かが何か埋めたのだろう。と言っても、ここに来た人物は限られるが。とりあえず取り出したカプセルを開けてみた。特に鍵が掛かっていたわけでもないのでそれはあっさりと開いた。

「これは…？」

中に入っていた数枚の紙。広げると中には私の国の文字で何か長文が書き綴られていた。その筆跡は間違いなくハンカチのサインと同じものだ。

「手紙…か？」

「この手紙を君が受け取る事を願ってここに残す。まず、子供に会えない事は残念だが、仕方ない。それより、君がここに来たという事は、既に死神に会っていると思う。」

「死神…？、何の話だ？」

「俺達は、登り始めて2ヶ月程は順調だった。しかし、途中で原因

不明で1人仲間が死んでしまった。他の者達は下山する事を主張したが、俺にはどうしても頂が直ぐ近くにあるような気がしてならなかったからそれに反対した。食料問題や他の者の体調がすぐれないのであれば仕方ないが、奴等はただ仲間の死に怖気づいたただけなのだ。」

「…相変らず頑固な奴だな…。」

私は苦笑いしながら手紙を読み進める。

「仲間割れをして俺は山に残った。そして食料を持って仲間と袂を分かった。俺の計算では歩行で1日以内に辿り着ければ、多少の足止めを食っても必ず下山できる計算だった。そして、思い通り、頂に向かつて半日後、奴が突然現れた。そいつは上から下まで黒一色の服を纏って岩肌に座ってこちらを見ていた。山の麓に住む民族に伝わる死神の姿そのものだった。昔から、山に近づくものに死を与えるという伝承を聞いた時には、お化けなんて信じた事もない俺でも少しは背筋が寒くなったもんだ。」

「伝承？」

そんな事もそう言えば聞いた事があるな、ただ私はよくある話だと記憶からすっかりそんな事は削除していた。黒一色の服装…、この地にそんな格好で現れた不自然さには勿論違和感があったのだが、まさか…。しかし、死神だと考えると説明はつく。いや、非現実と人は思うだろうが、山での過酷な出来事も私達には同じような非日常だ。

「しかし、奴は特に何もしなかった。俺の後ろからついてくるだけだ。俺はそれに慣れてしまい。話し相手として、利用した。そして俺は遂にここに辿り着いた。俺は暫く、この素晴らしい景色を堪能した。ここから見える景色、ここ空気、そしてここ土、その全てが素晴らしいものだ。唯一の気がかりはここから下山する体力が残っていない事だ。君がこの手紙を見ない事を祈る。」

「もう、見てるよ。」

俺は呟きながら最後の一枚に目を落とす。

「もし君がこの手紙と死神を見ているのなら、それは残念な事だ。助かるかどうかは分からないが、一刻も早く山を降りるんだ。ハンカチは形見として妻と子供に渡してくれ。」

手紙の最後の方の文字はかなり乱れていた。修二の奴がどういう気持ちでこの手紙を書いていたのが、伝わってくるようだ。少なくとも山にいる間の奴は誰よりも冷静な奴だった。

私は顔を上げて周りを見渡す。しかし、死神は見当たらない。昨日まで確かに私はテントの中に死神がいたはずだ。

「早く降りるか…。だが、私は目的を達成したんだ。ここで死ぬのも悪くない。」

ふと顔を上げた俺の目にハンカチがたな引いている。

「あ…。」

奴のサインの少し上に消えかけた文字が不意に浮かび上がった。

それは十年前に私が彼に送った一言。

「生きて帰ってこそ達成。」

その文字は確かに今までそこになかった。安物のペンで書きなぐったその文字は風雨に晒されて消えていた筈だったのに…。

「…分かったよ。」

まだ修二はそういう意味では何も達成していない。生きて帰ってこそその達成。昔読んだ本で誰かが言っていた言葉を何気なく書いたそれが今やつと自分の血肉になった気がした。

そうだ。ここで私が生きて帰れば…。あいつの夢、いや、私の夢でもある目標が達成できる。いつか誰かが達成するかもしれないが、今、私とその切符を握っているのだ。まだ、食料は十分にあるし、まだ体力にも少し余裕がある。天候と雪崩などまだ危険は十分に残されているが、生還できる可能性は高い。

「やればいいんだろ！」

私は誰に言うともなく呟く。いや、あの消えた文字を浮かびあがらせた修二の魂はきつとここにいるはずだ。

「一つだけ…。悪いけど、このハンカチはここに残していくよ。君

が行きで私が帰りとはいえ、ここに辿り着いた証だからな。代わりにこの手紙を貰っていく。」

俺は手紙をポケットに入れると後ろを振り返った。

「…！」

そこには、死神が無表情な目をこちらに向けていた。

「もう、あれから二十年か…。父さん。」

若者は、頂上に刺してあったハンカチを手にとると、その片隅のサインを見て涙ぐんだ。背後に立っていた仲間の1人が若者の肩に手を添える。

「良かったじゃないか。そのハンカチは父親の形見なんだろう？」

「ええ。修二のサイン。間違いなく父親のものです。母さんも喜ぶぞ…。」

若者は嬉しそうにハンカチをポケットに仕舞いこむ。

「写真も取ったし、後は土を採取するくらいだな。」

「はい。ん？」

若者は足元の土が少し盛り上がっている事に気づいて、しゃがみこんだ。

「どうした？」

周りの数人の仲間が集まってくる。

「何か埋まってる。」

若者は土を掘り返して、何かカプセルのような物を掘り起こした。

「何だこれ？」

それは少し力を入れるとあっさりと開いた。中には数枚の手紙らしきものが入っている。皆が見守る中で若者は手紙を黙読する。

「親父の字かな…？、誰かに宛てたものだ。」

「いや、内容からすればそうだろ。凄いな二十年前の手紙だよ。」
背後から一緒に黙読していた1人が感嘆の声を漏らした。

「そうだな……」

若者も手紙の内容を見てそう確信したようだった。写真でしか会ったことのない父親に手紙だけでも再開できた事で涙ぐむ。

「あれ？」

「どうした？」

最後の一枚を捲った若者の声に仲間が反応する。

「この一枚だけ違う字だ。」

「違う字？」

最後の一枚は確かに紙の質や筆圧が明らかに違っている。

「もしかして、十年前にこの山で行方不明になった。親父さんの友達じゃないか？、ここに來た可能性があるのは、その人しかないぞ？」

「ええ、僕もそう思っていました。」

「何て書いてあるんだ？」

「えーと……。『私は今から山を降りる。この手紙も持って帰ろうかと思ったが、死神を見てしまった以上は私は助からないだろう。もしこの手紙を読んで、死神を見ていない者がいれば、ハンカチと手紙をここに届けて欲しい。』」

紙の一番下には、若者のかつて住んでいた住所が書かれてあった。

「死神って……」

「お前の親父さんの手紙にもそんな事書いてあったな。」

若者の手が少し震える。

「どした？」

「さっき、そこで黒ずくめの男に会っただろ？」

「ああ、おいおい、お前まさか。こんな事信じてるのか？、そりや気持ち悪い奴だったけど、死神なんかいるはずないだろ？、笑わせんな。」

仲間は若者の心配を一笑した。

「昔は、大変だっただろうが、今の近代装備じゃ、この山も昔程は難関じゃない。さあ、写真を撮ったら帰るぞ？」

「は…はい。」

手紙をポケットに仕舞いこんだ若者が振り向くと、少し離れた岩肌
に黒ずくめの男がじっとこちらを見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4182w/>

死神の杖

2011年10月5日03時27分発行